

昭和七年十二月

# 野口郷土調査

和歌山縣  
日高郡

野口尋常高等小學校

## 序

従来の我国に於ける教育は、主智的劃一主義に流れそこに何等の生命をも見出され得なかつた。殊に農村学校の教育等は、都市教育に禍され、根本的に誤謬の道を辿り、農村獨特の教育をなし得なかつた処に大疾患がある。□□時代は思想的に經濟的に前古未曾有の難局に遭遇し、教育の地方化、實際化を叫び、教育が実社會に即し、生活の上に立脚すべき事を要求してゐる。今日の劳作教育も郷土教育も將又吾等が提唱せんとする、農村教育も此の意味に於て、大ひに生きてゐるのである。然らば其の教育の地方化、實際化は如何にして行はるべきか、其れは郷土調査をなす事により、其の地方に於ける教育の基礎を確立し、適切なる規準を設け之に據る事に於て、所期の目的を十二分に達成し得るものと信じて疑はないのである。故に我校に於ては早くより此の点に着眼し、遂次之が調査を行ひ、教育の出発点としては来たが、未だ徹底なるものを成し得なかつた。そこで本年春、是非之が完成を計り度き念願から職員一同手分けをして調査を始めた。其の間各地になされた郷土調査が余りに煩雜に流れ教育的意味が乏しく利用に不便を感じるもの、或は余りに簡にすぎ郷土調査としての價値を失へるもの等の多きを、反省し教育の基礎たることを眼目として、要領よく纏めることに腐心し、漸く出来上つたのである。之によりて我が校に於ける教育の方途は明かとなり、それがやがて此の地の村是の確立ともなるのである。云はゞ此の郷土調査は野口村將來の燈明台でもある。私は此の調査の完成を今村民と共に心から喜ぶと同時に、其の面倒なる仕事を果された職員各位に深く敬意を表すものである。殊に脱稿するや、之が印刷に当たり藪内訓導が其能筆を以て一人で引受け書かれた事に對し満腔の謝意を表せず居られないのである。

昭和七年 秋

野口尋常高等小學校長

佐竹 義 一

# 目次

## 第一篇 自然的方面

### 第一章 面積

### 第二章 地勢

#### 第一節 四圍の境界

#### 第二節 地形

#### 第三節 乾濕地の配置

#### 第四節 河川

#### 第五節 地沼

#### 第六節 丘陵

#### 第七節 堤防

#### 第八節 潮汐

### 第三章 氣象

#### 第一節 汽温

#### 第二節 濕度

#### 第三節 天氣

#### 第四節 風

#### 第五節 初雪初霜

#### 第六節 氣候概略

### 第四章 災異

#### 第一節 地震及津波

#### 第二節 暴風雨

#### 第三節 旱魃及飢饉

第五章 土壤

第一節 地質

第一項 中世層

第二項 第四期新層

第二節 土性

第六章 森林

第一節 位置

第二節 種類及面積

第三節 所有者別面積

第七章 植物

第八章 昆蟲

第九章 病蟲害

第二篇 人分的方面

第一章 人口

第二章 交通

第一節 道路

第二節 輸送

第三節 郵便電信其他

第三章 村治

第一節 歷代村長

第二節 村會議員

第三節 水利組合

第四節 農會

第五節 養蚕実行組合

第六節 信用組合

第七節 青年會

第八節 婦人會

## 第四章 神社宗教

第一節 傳説

## 第五章 教育

第一節 孝校教育

第一項 小孝校沿革

第二項 校地及設備建物

第三項 生徒ニ関スル調査

第二節 義務教育以外の孝校教育

第一項 高等科入孝者数及尋常科卒業生ニ対スル歩合

第二項 中等孝校入孝者数

第三項 卒業後の状況

第四項 農業補修孝校

## 第六章 産業經濟

第一節 職業別戸数

第二節 土地

第三節 農業生産物

第四節 林業生産物

第五節 工業生産物

第六節 農業生産費

第七節 其他産業生産費

第八節 産業上利益

第九節 生産費一覽

第十節 産業振興上の諸機關

## 第七章 民俗

第一節 俚謡

第二節 童戯

第三節 郷土行事

第四節 方言訛語

## 第八章 保健衛生

第一章 食二関スル調査

第二章 住二関スル調査

第三章 衣二関スル調査

第四章 村民睡眠時間調査

第五章 孝齡兒童ニ於ケル標準睡眠時間ト本校孝齡兒童睡眠時間トノ比較

第六章 家庭常備藥

第七章 醫師及助産婦

第八章 出産及乳兒死亡累年比較

第九章 傳染病者累年比較

# 第一篇 自然的方面

## 第一章 面積

野口	一五九四七一〇、六八平方米
熊野	一八三四七一〇、六七平方米
岩内	七六三六六三、三四平方米
總面積	四一九三〇八四、六九平方米

## 第二章 地勢

### 1 四囲の境界

第一図参照

東 笹峠をすぎる略南北の線を界として丹生村に接す

東北 日高川を隔て、矢田村

西 日高川を隔て、御坊町

南 講山の峯続きを以て塩屋村

北 日高川を隔て、矢田村又は藤田村

以上の如く本村は前に日高川を控へ、後には眞妻山脈の支脈をおひ他村と全く孤立の形を示す

### 2 地形

本村の東南は山地にして西北は低地なり

三里峯、清冷山より発したる眞妻山脈は西して、眞妻山に連り更に南西走して丹生・切目川・稲原三村境の庄谷山（三〇〇m）となり、二分して一は本村の東南隅講山（一八三m）となる。更に別れて一は笹峠（四二米）より連なりて千曳山（一二〇m）、見山（一五〇、三米）の絶壁となり、見山は略本村の中央に聳へ、北は絶壁によりて、日高沖積平野に面し、南は緩斜を以て熊野谷に向ふ。末は西して岩内の丘陵となる。他は本村の南境を走り、熊野谷を挟みて見山に対し遠く塩屋村の狼煙山（五〇m）に至る。

### 3 乾濕地の配置

#### 4 河 川

低地は前述の如く、北・西に多く随って湿地も主として北・西に存す。而れども野口平野は主として、砂質壤土なれば多く乾地にして、只其西部稍濕潤なり。岩内平野の低地及熊野谷は排水よろしからざるを以て湿地多く他は田は多く一毛作なり。

#### イ日高川

護摩壇山に源を發したる日高川は護摩壇・城ヶ森・虎ヶ峯の三山脈の水を集めて千廻曲折、山岳重疊の間を縫ひて、略東北東より西南西に走り奔流岩をかみつゝ漸く日高平野に達す。本村の東隅は即ち日高平野の起りにして、松瀬・和佐を過ぎて南し、千曳山の断壁をつける水は漸くおさまりて、金屋の淵をなし野口堰より水を左に分ち、更に下りて六郷堰より右に分けて緩流、本村の北境を通り、更に方向を西南に轉じて本村・御坊町の境を通り日高湾に注ぐ。

#### ○金屋淵 水深六米に余り日高川第一の深淵なりと

○野口堰 大字野口字三年垣内に於て水を左岸に入れ得る如くせる堰にして、其の長さ一四〇米、幅九米に及ぶ（運河に就ては後に述ぶ）。寛永九年普請と文書にあり、其後屢の洪水に流されしも、殊に明治二十二年八月の大洪水には残らず流失し大いに困難し、遂に他村の地主より金品を借り漸く復旧せりと云ふ。この堰年々の維持費として反当二円を要すと。

○六郷堰 矢田村小熊即ち右岸に分水せんとして六郷堰あり。六ヶ郷に亘る広大なる灌漑地を持つによりこの称ありと云ふ。

○天田中洲 野口村・塩屋村・御坊町の三ヶ村にまたがる日高川口の砂洲にして、本村領のみにも畑約一ヘクタールに及ぶ。尚本村の北部に於ては日高川の水次第に南による傾向あり。

#### 口熊野川

本村の東境笹峠附近より源を發して西流し、岩内を経所謂「こと」の地より次第に南西に轉じつゝ略日高川に並行して塩屋村に入り日高川に入る。流程四二四〇米、水深下流に於て〇、六米、幅員五、五米堤防不完全により屢々氾濫の害あり。

#### ハ野口湯河

野口堰より發したる水は西流して、野口平野の中央を流れ野口八一、三ヘク

5 池沼

大字野口は湯掛り及井掛りなれば池なく熊野・岩内に多し。

タールの田を灌漑す。この湯川出来ざりし以前は、野口には水田稀なりしも完成後現代の如く豊かなる土地となりたり。幹線長さ二、九キロメートル、幅員四、一 m

池名	字名	水面積	掛反別
後谷	熊野	一六一六五・三㎡	二三町
楠木谷	〃	一九八三・五	一
大池	〃	一一五〇四・一	一〇
柳ヶ谷	〃	八二四一・三	五・五
池ヶ谷	〃	四九七・九	〇・五
扇谷	〃	五〇一・八	六
東山	岩内	七三四九・八	一六
前山	〃	五一七四・九	

此の外ポンプ掛り 岩内八町 野口十一町

後谷池は明治六年鈴木立庵其他、熊野・岩内の区民発起となり、岩内は講を結びて負債を起し、熊野は一時負担として起工、然れども此は以外の大工事にして、殊に水路に至りてはトンネルをうがつなど実に難工事なりき。しかし其の池なりしたため新田一七町開け恩恵大なり。

6 丘陵

本村の南部は山地なれども余り高からず。殊に西南の地は殆ど丘陵と言得べく近年開墾せられたるもの多し。地形に於て述べたる如く、見山を成形せる山脈の西端は岩内及野口・熊野の西部に於て丘陵をなし洪積層の土地と殆ど見分けつかざる如き有様なり。この丘陵の東部は森林帯にして松林多く西部及北部は開墾せられて畑地となれるもの多し。

7 堤防

a 日高川流域

沿革 記録としてはなけれども古老の言によれば明治初年まで小さき堤防あり。明

2 湿度

最低	平均最低	最高	平均最高	平均温度	月別	年別
14.4	20.3	32.0	28.9	24.6	九	昭和
6.4	12.6	26.8	22.2	17.4	一〇	和
4.8	8.6	22.3	18.6	13.6	一一	六
-1.0	5.7	20.3	13.7	9.7	一二	年
-4.0	2.1	17.1	12.2	7.2	一	昭和
-2.5	2.0	15.5	9.2	5.6	二	
-2.0	3.6	19.3	12.6	8.1	三	
1.0	7.9	22.6	17.9	12.9	四	
8.9	13.6	26.6	22.6	18.1	五	
13.1	18.3	31.2	26.1	22.2	六	
17.1	23.4	35.7	30.7	27.1	七	
21.5	23.7	33.8	31.2	27.5	八	
-3.0	11.7	37.2	20.6	16.2	六年平均	和
-1.0	12.7	36.0	20.5	16.7	五年平均	
	12.1		20.6	10.4	平年	

第三章 気象

1 気温

8 潮汐

満潮なる時本村の西境天田河原の一部まで浸すことあり。

b 熊野川堤防

治二十二年八月大洪水には河水堤防を氾しあまつさへ、野口字山屋即ち字坂口の堤防潰れて大損害を蒙れり。之より財政上の回復をまちて徐々に改修に着手す。即ち潰れたる場所は直ちに着手、其接続せる上野口附近堤防は明治二十九年、明治三十六年には古森・北野口間三十七年には其残りかくしてやゝ完全なる堤防竣成し現在に到れり。尚此の間危険なること多々あり。降雨続けば村民戦々恟々たり。現在の野口堤防総延長三三二六米・高さ二・四米。岩内にも野口の約2/5の長さを有する堤防あり。

岩内附近にて昔より屢々崩壊或は堤頭を越す等甚だ不完全にして、流域の田の荒さるゝ事多く、附近の田又排水よろしからず。上流高さ二・七五米 下流一・〇米

5 初霜・初雪

日高郡内に於て最も強かりし風は明治三十三年十二月七日の岬に於る四〇・六mなり。

春 北西  
夏 南東  
秋 北北東  
冬 北西

季節風

風向は各部落により異なるも右は主として孝校附近による

風向	月
北	一
北	二
北	三
南東	四
南東	五
南	六
南	七
南	八
北	九
北	一〇
北	一一
北	一二

4 風

曇	雨	晴	年	
			月	年
3	10	17	九	昭
7	6	18	一〇	和
8	6	16	一一	六
10	3	18	一二	年
11	2	18	一	昭
10	7	12	二	和
4	3	24	三	七
7	10	13	四	年
9	6	16	五	
10	8	12	六	
1	6	24	七	
4	8	19	八	
84	75	207		計
				考

3 天気

降雨日数	最高雨量	総雨量	月別	年別
12.0	115.0	338.0	九	昭
8.0	51.2	225.7	一〇	和
9.0	37.1	84.3	一一	六
7.0	42.2	135.5	一二	年
3.0	14.6	18.7	一	昭
8.0	11.0	36.8	二	和
10.0	18.0	68.6	三	七
13.0	26.3	132.8	四	年
11.0	93.1	22.5	五	
12.0	114.7	115.5	六	
8.0	101.0	215.0	七	
21.0	26.8	203.4	八	
125.0	115.0	1627.0	六年平均	
115.0	159.0	1595.7	五年平均	年
139.0		1737.0	平年	

年	初霜	初雪
昭和六年	十二月二日	十二月十三日
昭和五年	十一月十五日	十二月二十五日
平年	十一月廿六・七日	十二月十五日頃

6 気候概略

本村は略々本縣沿岸地方の気候の中に加へらるべきで気温平均16.4。前述の如く八月最も暑くして二月最も寒し。本村中に於ても野口・岩内は北風強く従つて気温比較的低く、熊野は見山山脈の影響をうけ北風少なく西風のみにて気温高し。雨量は又全国平均一五〇〇ミリメートルに比し遙かに高く殊に七月最多なり。最少は二月季節的に云へば冬雨量少く夏多し。降雪日は平均十四日である。最も多きは二月なり。

第四章 災 異

主として近世しかも本村に傳へられ記録されてゐるものを記す。

1 地震・海嘯

古くは元弘年間より宝永年間までの間、紀州には数回の地震・海嘯ありたる由なるも、本村にはかくの如き記録なし。嘉永七年十一月五日大海嘯あり。岩内宮の前に多くの舟押し塩屋村民所有の百五十石積船もこゝにて破損せりと云ふ。

2 暴風雨

a 明治二十一年暴風雨

八月三十日大風雨にて倒れし家屋百戸以上に達し死者一名を出す。安樂寺の山門及樓門倒ると。

b 明治二十二年洪水

八月十九・二十日の強雨はやがて大洪水となり、日高川は二丈五尺の大増水にて、水堤防を越し日高平野二千町歩は全部氾水の下となり石河原となる。本村にて水は太子坂の下まで来り。対岸は道成寺石段六段まで浸水す。

○損害 死者 一 負傷者 一四 牛馬損失 一

建物 流失破損せしもの 二四九

耕地流失 一町三反

埋没又は表土流れしもの 一二六町三反

船舶流失 四

其の他の損失全く数へるにいとまあらず。且水利用運河の欠損は復旧するに拾年余を要したり。

○日高郡の損害

遭難町村

家屋流失

家屋崩れしもの

浸水家屋

死者

傷者

浸水耕地

牛馬損失

堤防崩れし所

三

五九三

一五三

一九一三

二二九名

一九名

二〇四〇町

五四頭

一二四九ヶ所

c 明治二十九年暴風雨

八月三十一日より九月十一日までの間に三回にわたり暴風雨あり。

d 明治三十六年洪水

北野口堤防危かりしも他村の堤防缺壊により其厄を免る。この時西河原堤防缺潰、田畑約十六町流失

e 大正六年暴風雨

八月二日、三日と降れる雨は遂に三日夕方に至り大洪水となる。日高川増水一丈七尺、浸水家屋四十戸

f 大正十年水害

七月十四日増水一丈六尺。藤井堤防欠潰により難を免る。

### 3 旱魃及飢饉

慶雲三年七月紀伊に飢饉ありし由続風土記に見ゆ。其後文久年間までの間に記録に残れるもののみにしても三十を数ふ。本村に於ても故老の言い傳へしものとして残れるもの多々あり。而して旱魃あれば野口は豊年にして熊野・岩内は凶作の如し。水利の關係によるべし。

a 嘉永五年四月八日より八月十六日まで同六年五月十三日より八月十三日まで雨降らず。熊野・岩内水涸れ凶作。野口大豊作なり。日高川雪駄を以て渡を得たりと。

b 明治十六年夏、雨降らざること六十五日。日高川の水大いに減じ田面亀甲白裂を生ず。村民日夜水引に奔走し毎夜火を山上に焚きて雨を乞ふ。日高川の上流和佐・入野・松瀬・玄子は水をせき、水車により川水を汲上げたれば下流更に減水し、野口村民遂に九月六日水論を起し、九月十日男児残らず鋤等を持ちて、腰辨当を持ちて川さらへと称し水車及堰を切り流す。然れども直ちに郡吏出張して和解す。其際官当局より救済金により救はれたり。

c 明治二十六、七年大旱魃  
二年引続き旱魃あり。大字熊野にて收穫三分若しくは五分を減じたり。

## 第五章 土 壤

### 1 地 質（地質圖参照）

岩代・鹿ヶ瀬間にある時代未詳の中世層は本村に於て主として山地部、即ち熊野及野口・岩内の一部をなし、岩内の中世層の背後の山と日高川の間には洪積層あり。而して日高川に臨む野口平野及熊野川の下流の平野は殆ど沖積層なり。

#### a 中世層

本層はすべて水成岩にして、頁岩・砂岩・蛭岩・角岩・石灰岩より成れども、主として頁岩・砂岩の互層たり。而して本層は印南原等の炭層と日高郡北部の白亜紀層の直下に整合する事等より考ふれば、白亜紀以前恐らくは珠羅紀層上部のものと認定し得、走向は北六十度乃至七十度、東傾斜五十度乃至五十五度西北なり。さて累層中の頁岩は灰色又は黒色にして時々砂質を帯び往々薄き板状節理を有す。然れども稜塊に分離し又は不規則の薄片

に剥るもの多し。殊に砂岩と縞状交層を成す時は剥性なるを常とす。風化して褐色稀に煮赤色を呈す。砂岩は帯青灰色中粒質のもの大部を占め、累層の上部に位して居る。而して此の砂岩は米粒大の黒色頁岩を散布す。此の岩石を採取し本村にて石材として使用しつゝあり。

b 第四紀新層

イ 洪積層 本層をなす岩石は礫層を主として、砂層之にまじり露出褐色なり。此層の露出は岩内に於て見られ、中世紀山岳の末端に小丘陵をなし下沖積層に臨み多くは礫層をなす。しかもその粒大にして鶏卵大なり。

ロ 沖積層 本層は洪積期以後殆ど地変なく、今日の河海の沈積せし跡にして、現時尚其作用を連続しつゝあるを以て、地質は柔軟の泥土或は礫層より成り層位水平なり。熊野川に沿ひたる熊野の一部、岩内の一部及野口平野はすべて之に属す。

2 土 性

本村は前述の如く沖積層、洪積層及び中世紀層に分れたるにより、其土性も又大体三つに分れる如く考へらる。

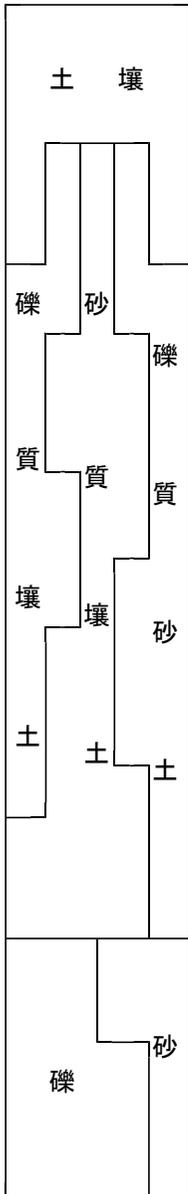
a 中世紀層：：：：熊野

礫質壤土にして深さ五〇cmより三〇cmなり。其下壤土なり。

b 第四紀新層：：：：野口

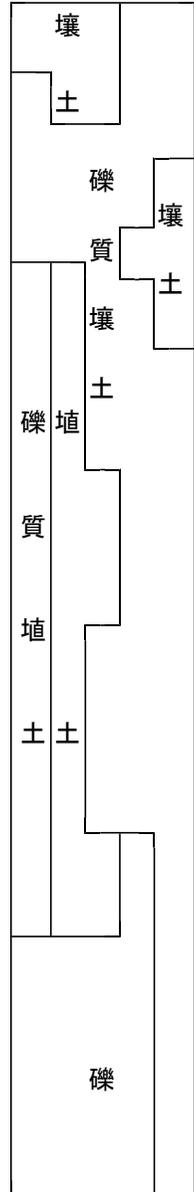
上より五〇cmより九〇cmまで壤土にして其下は礫質壤土・砂質壤土・礫質砂土にして其下は砂、礫である。

側断面



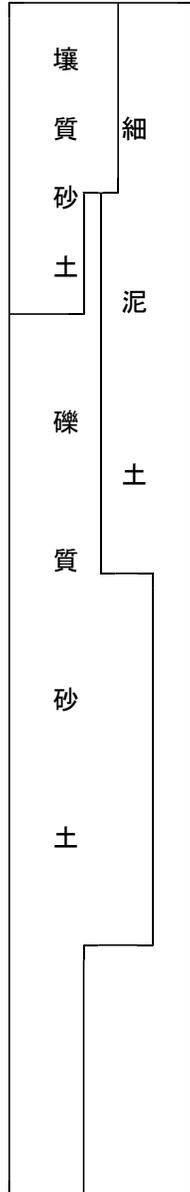
c 第四紀新層：：：：岩内の一部

土は壤土或は礫質壤土にして壤土は40〜80cm・礫質壤土50〜300cmに達し、其の間に埴土或は礫質埴土あり。其下は礫なり。



d 第四紀新層：：：日高川に沿ひたる所

上は壤質砂土或は細砂土にして壤質砂土は上より80〜140cm、細砂土は300cm、其下は礫質砂土なり。



### 第六章 森林

#### 1 位置

地形から見て東南部は山地なれば随って森林も亦其部分に多く、殊に南部最も著し。山脈別に云へば、見山山脈の西部及北西講山山脈の北面に松林多く、見山山脈の南面及東部には雑木林多し。竹林は見山山脈の北麓及日高川沿岸にあり。

#### 2 種類及面積

針葉樹林	一〇九一、九三反
針潤混濬林	一九〇、五一九反
無立木地	四五五、四二反

計 一七三七、八六反

3 所有者別

村有林 三一〇反五一九

社有林 三八反三〇五

寺有林 一一二、六二五

私有林 一二七一、四一一

備考 部落有林は村有林に含む。

第七章 植物

植物目録

1 合辨花類

1 菊科

ごまな・いなかぎく・おにたびらこ・あきののげし・ひめぢしぱり・かんらん・ぢしぱり・ちしや・にがな・や  
くしさう・はるのげし・たんぼゝ・こおぞりな・やぶたびらこ・かうやぼうき・きつねあざみ・ごぼう・おけら  
・きんせんか・つはぶき・のぼろぎく・ふき・よもぎ・かはらにんじん・ほそばにんじん・をとこよもぎ・とき  
んさう・きく・しゅんぎく・ぢよろうぎく・りゆのうぎく・のこぎりさう・せんじゆぎく・はるしやぎく・せん  
だんぐさ・たうこぎ・きくいも・ひまわり・たかさぶらう・めなもみ・百日草・がんくびさう・ひめのがんくび  
さう・やぶたばこ・かせんそう・おぐるま・むぎわらぎく・ちゝこぐさ・はゝこぐさ・かはらはゝこ・ひめむか  
しよもぎ・こんぎく・しらやまぎく・しおん・ひめしおん・えぞぎく・よめな・ふぢばかま・ぬまだいこん・や  
まあざみ・のあざみ

2 葫蘆科

あまちやづる・とうなす・からすうり・ひょうたん・ゆうがほ・とうぐわ・きうり・まくわうり・しろうり・す  
いくか・へちま・つるれいし・すゞめうり

3 桔梗科

ききよう・つるにんじん・ほたるぶくろ

4 敗醤科

おみなへし・おとこへし

5 忍冬科

たにうつぎ・うるこんうつぎ・にしきうつぎ・はこねうつぎ・にはとこ・うぐひすかぐら・ひやうたんぼく・が  
まずみ・すひかづら・さんごじゆ・やぶでまり・こばのがまずみ・そくづ

6 茜 草 科

あかね・かはらまつば・やへむぐら・ありどほし・つるありどほし・はくちようげ・やいとばな・しちようげ・くちなし・ふたばむぐら

7 車 前 科

おほばこ

8 爵 牀 科

きつねのまご・はぐろさう・おぎのつめ

9 狸 藻 科

たぬきも・ひめたぬきも・みゝかぎくさ

10 苦 苣 苔 科

グロキシニア・いはたばこ

11 列 當 科

なんばんぎせる

12 胡 麻 科

ごま

13 紫 蔵 科

そけいのうぜん・のうぜんかづら・きさゞげ(梓)

14 玄 参 科

くちなしぐさ・ひきよもぎ・こゞめぐさ・こしほがま・おほいぬふぐり・たちいぬふぐり・かはぢしや・はたけくはがた・あぜとうがらし・あぜな・うりくさ・きくも・あぶのめ・さぎごけ・ときはゝはぜ・きり・はなちよ  
うじ・ぢきたりす

15 茄 科

つくばねあさがほ・たばこ・ちようせんあさがほ・とまと・いぬほゝづき・ぢやがたらいも・なすび・ひよどり  
ぢようご・くこ・ふゆさんご・めじろほゝづき・るりやなぎ・とうがらし・ほうづき・はだかほゝづき・せん  
りほゝづき・いがほうづき・はしりどころ

16 唇 形 科

あきちようじ・ひきおこし・なぎなたこうじゆ・いぬこうじゆ・えごま・しそ・はくか・ひめはつか・くるまば  
な・たうばな・あきのたむらさう・さるびや・なつのたむらさう・いぬごま。めはじき・ほとけのぎ・やまじわ  
う・おどりこさう・じゃこうさう・たつなみさう・きらんさう・じゅうにひとへ

17 馬 鞭 草 科

くさぎ・はまごう・むらさきしきぶ・やぶむらさき・くまつら・びじよざくら

18 紫 草 科

たびらこ・ちしやのき

- 19 花 葱 科  
くさきやうちくさう
- 20 蔬 花 科  
あまだまし・ねなしかずら・ひるがほ・こひるがほ・あさがほ・さつまいも・るこうさう
- 21 蘿 摩 科  
いよかづら・ががいも・すずざいこ
- 22 夾 竹 桃 科  
けふちくたう・ていかづら・日々草
- 23 龍 膽 科  
あさぎ・ががぶた・あけほのさう・せんぶり・とうやくりんだう・りんどう・つるりんどう
- 24 木 犀 科  
いぼたのき・たまつばき・ひゝらぎ・もくせい・こばのとねりこ
- 25 安 息 香 科  
えごのき
- 26 灰 木 科  
かんざぶろうのき・くろばい・はいのき・みゝずばい
- 27 柿 樹 科  
かき・しなのがき
- 28 櫻 草 科  
こなすび・とらのを・ぬまとらのを
- 29 紫 金 牛 科  
いづせんりやう・まんりやう・やぶこうじゆ・たいみんたちばな・もくたちばな
- 30 鹿 蹄 草 科  
ぎんりやうそう
- 2 離 辨 花 類
- 1 山 茱 萸 花  
あをき・さんしゆゆ・なきいかだ
- 2 繖 形 科  
にんじん・のだけ・はまぼうふう・せり・せんとうさう・みつば・どくぜり・みしまさいこ・やぶじらみ・やぶにんじん・ちどめぐさ
- 3 五 加 科  
うど・たらのき・はりぎり・うこぎ・きづた・かくれみの・やつで
- 4 蟻 塔 科

- 5 柳葉菜科 ふさも・ありのとうぐさ
- 6 柘榴科 みずたまさう・まつよひぐさ・つきみさう・あかばな・ひし・たごぼう  
ざくろ
- 7 千屈菜科 さるすべり・みそはぎ・みづまつば
- 8 胡頹科 あきぐみ・なつぐみ・なはしろぐみ・つるぐみ
- 9 瑞香科 みつまた・ぢんちようげ・がんび・こがんび
- 10 仙人掌科 さぼてん・かぶと・かにさぼてん・ひもさぼてん
- 11 秋海棠科 ベゴニア
- 12 椅科 くすどいげ
- 13 董菜科 こすみれ・すみれ・たちすみれ・たちつぼすみれ・つぼすみれ
- 14 てい柳科 さつき・ぎよりゆう
- 15 金絲桃科 おとぎりさう・きんしばい・ひめおとぎりさう・びやうやなぎ柳柳
- 16 山茶科 さかき・ひさかき・もくこく・ちゃ・つばき・さざんか
- 17 梧桐科 あをぎり
- 18 綿葵科 わた・とろゝあふひ・ふよう・むくげ・もみじあふひ・ぜにあふひ・たちあふひ
- 19 田麻科 ほだいじゆ
- 20 葡萄科 のぶどう・びんぼうかずら・つた・えびづる・ぶどう

- 21 鼠 李 科  
いそのき・くまやなぎ・なつめ
- 22 鳳 仙 花 科  
ほうせんくわ
- 23 無 患 子 科  
むくろじ
- 24 楓 樹 科  
かへで・ちりめんもみじ
- 25 省 治 油 科  
ごんずい
- 26 衛 矛 科  
つるうめもどき・にしきぎ・まさき・つるまさき・まゆみ
- 27 冬 青 科  
いぬつげ・そよご
- 28 漆 樹 科  
ぬるで・つたうるし・うるし・はぜのき・やまうるし・やまはぜ
- 29 黄 楊 科  
つげ・ひめつげ
- 30 水 馬 齒 科  
みづはこべ
- 31 大 戟 科  
たかとうだい・とうだいぐさ・なつとうだい・にしきさう・ほるとさう・のうるし・なんきんはぜ・たうごま・えのきぐさ・あかめがしわ・ゆづりは・ひめゆづりは・かんこのき・こみかんさう・ひめみかんさう
- 32 遠 志 科  
ひめはぎ
- 33 棟 科  
ちやんちん・せんたん
- 34 芸 香 科  
からたち・きんかん・みかん・くねんぼ・だいだい・たちばな・ゆづ・まつかせさう・こくさぎ・いぬざんしよ  
う・さんしよ・ふゆさんしよ
- 35 金 蓮 花 科  
のうぜんはれん
- 36 酢 漿 科

37 □<sup>?</sup> 牛 児 科  
かたばみ・むらさきかたばみ

38 薔 薇 科  
てんじくあふひ・もんでんじくあふひ・ふうろさう・げんのしやうこ

39 荳 科  
あんず・うめ・すもも・よしのざくら・やまざくら・にはうめ・櫻桃・もも・ゆすらうめ・せいようばら・のい  
ばら・はまなす・われもこう・きんみづひき・あかしもつけ・きじむしろ・みつばつちぐり・をへびいちご・へ  
びいちご・かじいちご・きいちご・ふゆいちご・やまぶき・かまつか・かなめもち・びは・せいようなし・りん  
ご・かまつか・かなめもみじ・ぼけ・こでまり・こどめばな・しじみばな・しもつけ・しろばなしもつけ・はざ  
きしもつけ

40 篠 縣 木 科  
ふじまめ・さゝげ・あづき・いんげん豆・たんきり豆・なたまめ・くず・ほど・だいづ・つるまめ・やぶまめ・  
えんどう・かすまぐさ・すゞめ・えんどう・やはづえんどう・つるなしえんどう・そらまめ・いぬはぎ・きはぎ  
・ねこはぎ・はぎ・まきえはぎ・めとはぎ・やはづさう・みそなほし・しばはぎ・ぬすびとはぎ・ときはやぶは  
ぎ・なんきんまめ・くさねむ・れんげ・はりえんじゆ・ふじ・なつふぢ・こまつふぢ・にはふぢ・みやこぐさ・  
あかつめぐさ・しろつめぐさ・しながははぎ・うまこやし・えにしだ・たぬきまめ・いぬえんじゆ・くらら・じ  
やけつばら・かわらけつめい・はぶさう・はふずほう・ねむりぐさ・ねむの木

41 金 縷 梅 科  
ブラタナス  
いすのき

42 海 桐 花 科  
とべらのき

43 虎 耳 草 科  
あじさい・あまぢやのき・うつぎ・うらじろうつき・づだやくしゆ・ゆきのした

44 景 天 科  
きりんさう・べんけいさう・みせばや・つめれんげ・こもちまんねんぐさ・まんねんぐさ

45 茅 膏 菜 科  
いしもちさう・もうせんごけ・こもうせんごけ

46 十 字 花 科  
はたざほ・いぬなづな・ひめなづな・なづな・たねつけばな・いぬがらし・おらんだみづたがらし・だいこん・  
あぶらな・からしな・はなやさい・きやべつ・わさび・まめぐんばいなづな

47 罌 粟 科  
むらさきけまん・けし・ひなげし・ちやんぱぎく・はなびしさう

48 樟科

げっけいじゆ・あをもじ・くろもじ・だんこうばい・やまこうばし・たぶのき・くすのき・につけい・やぶにつけい

49 木蘭科

しきび・さねかつら・おがたのき・こぶし・はくもくれん・しもくれん

50 防己科

はすのはかづら・あをつとらふじ

51 小檗科

ひらぎなんてん・なんてん

52 木通科

あけび・みつばあけび・むべ

53 毛茛科

ふくじゆさう・あきからまつ・からまつさう・もからまつ・きつねのぼたん・きんぼうげ・たがらし・せんにさう・ぼたんづる・むらさきおだまき・ひめうづ・しやくやく・ぼたん

54 金魚藻科

きんぎも

55 睡蓮科

ひつじぐさ・じゆんさい・はす

56 石竹科

おほやまふすま・つめくさ・みゝなぐさ・うしはこべ・のみのふすま・はこべ・あめりかなでしこ・をらんだなでしこ・かわらなでしこ・なんばんはこべ・すいせんとう・せんとう・ひろはのまんでま・ふしぐる

57 馬齒莧科

すべりびゆ・まつばぼたん

58 蕃杏科

まつばぎく・つるな・ざくろさう

59 紫茉莉科

いかだかつら・おしろいばな

60 筧科

せんにちさう・あのこづち・いぬびゆ・ひゆ・はりびゆ・けいとう・のげいとう

61 黍科

はゞきゞ・ほうれんさう・あかぎ・かわらあかぎ・たうじしゃ

62 蓼科

そば・あい・まゝこのしりぬぐい・いたどり・いぬたで・おほいぬたで・さくらたで・さなへたで・ながばのう

63 馬兜鈴科  
なきつかみ・にはやなぎ・ほそばたで・みぞそば・みづひき・やなぎたで・ぎしぎし・すかんぼ

64 槲寄生科  
うまのすぐくさ

65 檀香科  
まつぐみ

66 蕁麻科  
かなびきさう

67 桑科  
あかそ・こあかそ・からむし・やぶまお

68 榆科  
あさ・あこう・いちじく・いぬびは・いたびかつら・かうぞ・かじのき・くわ・くわくさ

69 殼斗科  
むくのき・けやき・えのき・あきにれ

70 樺木科  
あかがし・しらがし(？)・あらかし・うまめがし・ならがしわ・くぬぎ・くり・こなら・しいのき・つぶらし  
ひ・まてばしひ

71 楊梅科  
おぼばやしやぶし・はんのき・ひめやしやぶし

72 楊柳科  
やまもゝ

73 胡椒科  
きぬやなぎ・しだれやなぎ・しばやなぎ・ねこやなぎ・こりやなぎ

74 白草科  
ふうとうかつら

75 金粟蘭科  
どくだみ・かたしろぐさ

3 單子植物  
せんりやう

1 蘭科

2 曇華科  
ふうらん・きんりやうへん・ほくろ・せきこく・えびね・しらん・ねじばな・きんらん・ぎんらん

だんどく

3 藁 荷 科

しょうが・めようが

4 芭 蕉 科

ばせう

5 鳶 尾 科

たうしょうぶ・ひめとうしょうぶ・ひあなぎ・あやめ・いちはつ・かきつばた・はなしょうぶ・しやうが(鳶尾科アラズ)・しやが・ひめしやが・さふらん

6 薯 蕷 科

おにどころ・うちはどころ・ひめどころ・もみぢどころ・やまのいも

7 赫 蒜 科

きつねのかみそり・まんじゆさげ・なつずいせん・きずいせん・水仙・はまおもと・たますだれ

8 百 合 科

さるとりいばら・しをで・じゃのひげ・やぶらん・ばらん・おもと・なぎいかだ・おらんだぎじかくし・くさずぎかづら・いとらん・つるば・うばゆり・おにゆり・かのこゆり・さゝゆり・ためともゆり・ひめゆり・やまゆり・たら・たまねぎ・ねぎ・のびる・らつきよ・ぎぼうし・みずぎぼうし・たうぎぼうし・おりずるらん・はなすげ・のぎらん

9 燈 心 草 科

すゞめのひげ・いぬいぬ・こうがいせきしょう・ひめこうがいせきしょう・ゐ

10 雨 久 花 科

ほていさう・さゝなぎ・みづあふひ

11 鴨 跖 草 科

いぼくさ・つゆくさ・むらさきつゆくさ

12 穀 精 草 科

いぬのひげ・ほしくさ

13 浮 萍 科

あをうきくさ・うきくさ

14 南 天 星 科

からすびしゃく・さといも・をらんだかゆう・しょうぶ・せきしょう

15 棕 櫚 科

かんのんちく・しゅうろちく・しゅうろ

16 莎 草 科

いとすげ・うますげ・をにすげ・かさすげ・かんすげ・じゅづすげ・はりがねすげ・ひかげすぎ・まつばすげ・いがくさ・ひでりこ・やまゐ・はたがや・くろぐわい・しかくい・しろがや・あぶらがや・ひめほたるゐ・ほた

17 禾 本 科  
るゐ・ふとい・ひめくゞ・はますげ・かはらすがな・かやつりぐさ・くゞかやつりぐさ

まだけ・たいさんちく・ほうらいちく・ほうをうちく・しまさゝ・はちく・ごさんちく・もうさう・かんちく・やまだけ・のだけ・おほむぎ・はだかむぎ・こむぎ・かもじぐさ・ごぼんさう・すゞめのちやひき・ひめこぼんさう・たつのひげ・みのぼう・かぜくさ・いとすゞめがや・にはほこり・よし・だんちく・あぜがや・みのごめ。ちからぐさ・ぎようぎしば・からすむぎ・かにつりぐさ・ひなさゝ・ぬかほ・ひえがへり・すゞめのとつぼう・いね・まこも・ちからしば・あは・えのころぐさ・おほあわ・ちゞみざさ・きび・ひえ・みずびえ・めひしば・ちごさゝ・なるこびえ・しば・すゞめのひえ・めがるかや・こぶなぐさ・うしのしつぺい・こめかや・いたちがや・かりまたかや・すゝき・かりやす・さとうきび・ちがや・じゅづだま・たうもろこし

18 水 鼈 科

とちかゞみ・みづおほばこ・すぶた・やなぎすぶた・くろも

19 澤 瀉 科

おもだか・くわゐ・さぢおもだか・へらおもだか

20 眠 子 菜 科

えびも・ひるむしろ

21 香 蒲 科

がま

4 裸子植物

1 松 杣 科

ねず・びやくしん・さばら・すいりゆうひば・もみ・ひのき・ひむろ・このてがしわ・すぎ・こうやまき・つが・こめつが・あかまつ・くろまつ・こやうまつ・てうせんまつ

2 一 位 科

いぬかや・てうせんがや・なぎ・まき

3 公 孫 樹

いてふ

4 蘇 鉄 科

そてつ

5 羊 齒 植 物

1 松 葉 蘭 科

まつばらん

2 卷 柏 科

いはひば・かたひば・くらまごけ

3 石 松 科

4 木 □<sup>ツ</sup>科 たうげしば・ひかげのかずら・みづすぎ

5 瓶爾小草科 すぎな・とくさ・いぬとくさ

6 微科 はなやすり・ふゆのはなわらび

7 海金砂科 ぜんまい

8 裏白科 かにくさ

9 水蕨科 うらじろ・こしだ

10 水龍骨科 みづわらび

11 苔葱科 ひとつば・のきしのぶ・ひめのきしのぶ・みつでうらほし・まめづた・わらび・ゐのもとさう・おほばのゐのもとさう・いはがねぜんまい・しゝがしら・おほたにわたり・しけした・へらしだ・やぶそてつ・みぞした

こうやのこけしのぶ

## 第八章 昆虫

### 昆虫目録

#### 1 鱗翅目

##### A 蝶亞目

1 鳳蝶科

アゲハ・キアゲハ・クロアゲハ・カラスアゲハ・テナガアゲハ・ジャコウアゲハ・モンキアゲハ・アヲスジアゲハ

2 粉蝶科

モンシロテフ・スヂクロテフ・モンキテフ・キテフ

3 斑蝶科

キョウサギマザラ

4 □<sup>キョウ</sup>蝶科

キタテハ・ルリタテハ・ヒオドシテフ・アカタテハ・ヒメタテハサカハチテフ・スミナガシ・ゴマダラテフ・コムラサキ・コムスチ・イチモンチテフ・ヘウモンテフ・ウラギンヒヨモン・メスグロヒヨウモン・ミドリヘウモ

5 蛇目蝶科  
ン・ツマガクロヘウモン・クモガタヘウモン・ギンボシヘウモン

5 ジヤノメテフ・ヒジヤノメ・コチャノメ・ヒカゲテフ・ヒメウラナミジヤノメ・クロヒカゲ・キマダラヒカゲ・コノマテフ

6 天狗蝶科  
テンゲテフ

7 小灰蝶科  
シジミテフ・ルリシジミ・ゴイシシジミ・コツバメベニシジミ・ツバメシジミ・ウラナミシジミ・アカシジメ・トラフシジメ・ムラサキシジメ

8 拝蝶科  
ダイメウセトリ・ミヤマセトリ・チャバナセセリ・キマダラセトリ・アオバセトリ・イチモンチセトリ

## B 蛾 亜 目

1 天蛾科  
メンガタスズメ・モモスズメ・ウチスズメ・エビガラスズメ・シモフリスズメ・クチバスズメ・コスズメ・セスズメ・ホウジャク・オホスカシバ・キイロスズメ・クルマスズメ・ホシヒトホウチャク

2 天社蛾科  
モンククロシヤチホコ・ツマキシヤシホコ

3 刺蛾科  
イガラ・ナシイガラ・アライガラ・クロシタアオイガラ

4 毒蛾科  
スギドクガ・マヒマヒガ・ドクガ・モンシロドクガ・カシワマヒマヒマ・チャドクガ

5 枯葉蛾科  
オビカレハ・カレハガ・マツカレハ・タケカレハ

6 窓蛾科  
アカジマドガ・マドラマドカ

7 帯蛾科  
オビガ

8 蚕蛾科  
カヒコガ・クハガ

9 天蚕科  
ヤママユ・シンジュサン・オホミズアホ

10 夜蛾科  
オホカブラヤガ・カブラヤガ・スチキノコ・ヤタロウ・オホケンモン・ウスズマガラス・フタオビコヤガ・キノ

11 斑<sup>ハ</sup> 蛾 科  
カワガ・ヨタロウガ・ハゲルマトモエ・オホトモエガ・フクラスズメ・ウンモンクチバ・キシタバアカエグリバ  
・アシプトガ・アケビコノハ・コウモンクチバ・クロキシタアツバ・アヤナミアツバ

12 鹿<sup>カ</sup>子<sup>コ</sup> 蛾 科  
ホタルガ・ウスバツバメガ

13 硝子<sup>シロ</sup> 蛾 科  
カノコガ・キハダカノコガ

14 燈<sup>トウ</sup> 蛾 科  
コスカシガ・モモブトスカシバ・セスヂスカシバ

15 尺 蛾 科  
ゴマダラヒトリガ・シロヒトリガ・クワゴマダラヒトリ

16 螟 蛾 科  
ヘウモンエダシヤク・ユウマダラエダシヤク・フタヤマエダシヤク・トンボエダシヤク・ウメエダシヤク・クワ  
エダシヤク・キマダラエダシヤク

17 巢 蛾 科  
ニ化メイガ・三化メイガ・クロスヂノメイガ・セスヂノメイガ・クワノメイガ・アワノメイガ・ワタノメイガ・  
ツトガ・シロオビノメイガ・モモノメイガ・マメノメイガ・ウスオビノメイガ・フタスチシマメイガ

18 葉 卷 蛾 科  
マユミスガ

19 避 債 蛾 科  
クワヒメイトヒキハマキ・クワアミメハマキ・マツツマアカハマキ・シンクヒガ

20 木 蠹 蛾 科  
チャノミノムシ

21 蝙 蝠 蛾 科  
胡麻斑木蠹蛾

ナミコホモリ

## 2 膜 翅 目

1 胡 蜂 科

スズメバチ・キイロスズメバチ・モンズズメバチ・ヒメスズメバチ・コガタスズメバチ・アシナガバチ・キオビ  
スズメバチ・ロスズメバチ・ギボシアシナガバチ・コアシナガバチ・ヒメアシナガバチ・ホソアシナガバチ・フ  
タモンアシナガバチ・スズバチ・トツクリバチ・クロバネドロバチ・フトフタオビドロバチ・ミカドドロバチ

2 蜜 蜂 科

- ミツバチ・クマバチ・ヌルハナバチ・クロマルハナバチ・トラマルハナバチ・ハラアカハナバチ・キイロマルハナバチ・トガリハナバチ・ヤノトガリハナバチ・ルリモンハナバチ・シロスチハナバチ
- 3 土 蜂 科  
ハラナガツチバチ・ヒメハラナガツチバチ・アカスチツチバチ・キオビツチバチ・オホモンハラナガツチバチ
- 4 細 腰 蜂 科  
ジガバチ・ルリチガバチ・ツチスリガ・クロアナバチ・ツツアナバチ・トガリアナバチ・マルモンツチスガリ・ギングサバチ・ジャバチモドキ
- 5 青 蜂 科  
セイボウ・ヨツバセイボウ・オホセンボウ
- 6 蟻 蜂 科  
ムネアカハリバチ
- 7 籠 甲 蜂 科  
クロベッコウ・オホシロフベツカウ・オホモンクロベッコウ・キオビベツコウ・アカボシベツカウ・ハリマベツコウ・カホモンクロベツコウ
- 8 姫 蜂 科  
アメバチ・マダラヒメバチ・コンバウアメハチ・オホモンクロベツカウ・カワムラヒメバチ・ウスヒメバチ・ムラサキウスヒメバチ・ヨコヒラタヒメバチ・キバラアメバチ・ツヤアカハラヒメバチ・クロヲナガバチ・アオムシヒラタヒメバチ・カコガハヒメバチ・ヨタウヤドリヒメバチ・アカアメバチ・ホウネンタハラバチ
- 9 没 食 子 蜂 科  
ナラフシバチ
- 10 樹 蜂 科  
マツキバチ
- 11 葉 蜂 科  
カブラハバチ・セグロアヲハバチ・オホムネアカハバチ・クロバアカマルハバチ・クロハバチ・セグロカブラハバチ
- 12 細 蜂 科  
コンボウヤセバチ
- 13 小 繭 蜂 科  
カモドキコマユ・ウmanoオバチ・マヒマヒコマユ・ヨコハママダラコマユ・クロバアカコマユ
- 14 小 蜂 科  
シリアゲコバチ・ミカドシリアゲコバチ
- 15 蟻 科

大アリ・クロオホアアリ・アカハリ・トゲアリ・オホヅアリ

### 3 微翅目

#### 1 蚤科

人蚤・犬蚤

#### 2 鼠蚤科

鼠蚤

#### 3 鳥蚤科

鳥蚤

### 4 雙翅目

#### 1 家蠅科

イヘバヘ・クロイヘバヘ・オホイヘバヘ・キンバヘ・ヒメクロバヘ・クロバヘ・セマダラハナバヘ・オホキンバ

#### 2 針蠅科

カヒコノウジバヘ・セスチハリバヘ・オホハリバヘ

#### 3 大麻蠅科

シマバヘ

#### 4 刺蠅科

サシバエ

#### 5 眼蠅科

クロメバヘ

#### 6 糞蠅科

ヒメフンバヘ

#### 7 ベツコウバエ科

ベツカウバヘ

#### 8 斑蠅科

ミスヂミバヘ・ヒマラヤアミメマダラバヘ

#### 9 毛蠅科

ミスアカケバヘ・ヒメセアカケバヘ・クロケバヘ

#### 10 蝶蠅科

ホシテフバエ

#### 11 大蚊科

マダラガガンボ・ミカドガガンボ・ベツカウガガンボ・キスチガガンボ・オホキリスチガガンボ

## 12 蚊 科

シロスチヤブカ・アカマダラカ・ハマダラカ・ヤブカ

## 13 糠 蚊 科

ヌカカ

## 14 ハナアブ 科

ノラハナアブ・クロハナアブ・ルリハナアブ・ハナアブ・オホハナアブ・ホシヒラタアブ・クロナガハナアブ・ヒラタアブ・オホフタホシヒラタアブ・シマアシブトハナアブ・スカシベツコウハナアブ

## 15 ブ ヌ 科

アシマダラブユ

## 16 水 虻 科

ミツアブ・カウカアブ・コガタミツアブ・ルリミツアブ・ハラキンミツアブ  
17 シギアブ 科

ハマダラシギアブ・ネウスシギアブ

## 18 虻 科

アカウシアブ・シロフアブ・クロメクラアブ・ウシアブ・キイロアブ・ヨスヂメクラアブ  
19 ツリアブ 科

クロバネツリアブ・ビロウドツリアブ・カウヤツリアブ

## 20 食 虫 虻 科

シホヤアブ・チャイロムシヒキ・オホムシヒキ・シロツヒメムシロヒキ・サキグロムシヒキ・アオメムシヒキ・アシナガムシヒキ・ホソムシヒキ

## 21 長 脚 蠅 科

アシナガキンバヘ・マダラアシナガキンバエ

## 5 韃 翅 目

## 1 天 牛 科

クワカミキリ・ヤマカミキリ・シロスチカミキリ・ノコギリカミキリ・トラフカミキリ・タケトラカミキリ・クスイカミキリ・ホシカミキリ・ヤハツカミキリ・シラホシカミキリ・ベニカミキリ・ヘリグロベニカミキリ・ミドリカミキリ・ルリカミキリ・ホソカミキリ・ルリホシカミキリ・アカハナカミキリ・ヨスヂハナカミキリ

## 2 擬 天 牛 科

カミキリモドキ・モモブトカミキリモドキ・ツマグロカミキリモドキ

## 3 瓢 虫 科

テントウムシ・シラホシテントウムシ・ナナホシテントウムシ・ベダリヤテントウムシ・ニジュウヤホシテントウムシ・アカボシテントウムシ・ヒメアカボシテントウムシ・ベニヘリテントウ・カメノコテントウ・アカスチ

- 4 偽瓢虫科  
ヒメテントウ  
ヨツボシテントウムシダマシ
- 5 金花虫科  
ヤナギハムシ・カタビロトゲトゲ・イタドリハムシ・クロボシサルハムシ・スゲハムシ・アカガネサルハムシ・フヂハムシ・ヨモギハムシ・アカガネサルハムシ・オホヨモギハムシ・ウリハムシ・クロウリハムシ・チンガサハムシ・ドロハムシ・イモサルハムシ・バラルリハムシ
- 6 豆象科  
マメゾウムシ・オホマメゾウムシ
- 7 三錘象虫科  
ミツキリゾウムシ
- 8 象虫科  
マダラアシゾウ・オホゾウムシ・シロコブゾウ・ナシチヨキリゾウムシ・コクゾウムシ・オトシブミ・ヒメクロオトシブミ・イネゾウムシ・ヒメシロコブゾウムシ・クリシギゾウムシ・ゴマダラオトシブミ・ナラシギゾウ・コフキゾウムシ
- 9 斑蝥科  
ハンメウ・ニハハンメウ・コハンメウ・カワラハンメウ・ヒメハンメウ
- 10 步行虫科  
ゴミムシ・ミイデラハンメウ・オホゴミムシ・コマヒコマヒカブリ・マヒマヒカブリ・ヒラタゴモリ・アオオサ・アオゴミ・キベリアオゴミ・ヘウタンゴミ・ナガヘウタンゴミ・アトホシゴミ・オホキベリアホゴミ・セアカゴミ
- 11 偽步行虫科  
クロキマワリ・ゴミムシダマシ・オホゴミムシダマシ・スナゴミムシダマシ・ヒゲプトゴミダマシ・コメゴミダマシ
- 12 ゲンゴロウ科  
ゲンゴロウ・コガタゲンゴロウ・シマゲンゴロウ・コシマゲンゴロウ・クロゲンゴロウ・ヒメゲンゴロウ・ハイイロゲンゴロウ・チャイロゲンゴロウ・マルガタゲンゴロウ
- 13 牙虫科  
ガムシ・コガムシ・ヒメガムシ・マメガムシ・マクソガムシ
- 14 鼓豆科  
ミズスマシ・ヒメミズスマシ・オホミズスマシ
- 15 鯨節虫科  
トビカツオブシ・ハラジロカツオブシ・ケアカカツオブシ・ヒメマルカツオ

16 穀 盜 科

コクヌスト

17 エンマ豆科

エンマムシ・コエンマムシ・ヒメエンマ・ルリエンマ

18 シデムシ科

ヤマトシデムシ・クロシデムシ・コクロシデムシ・ヒメヒラタシデムシ・オホヒラタシデムシ

19 大木吸虫科

マルケシキスヒ・ヨツボシケシキスヒ

20 出 尾 虫 科

アオバアリガタハネカクシ・キンボシハネカクシ（隱翅虫科二属ス）

21 金 龜 虫 科

ヒメコガネ・マメコガネ・ドウガネ・カナブン・コハナムグリ・セマダラコガネ・アオカナブン・ヒラタハナムグリ・シロスヂコガネ・シロホシオホハナモグリ・チャイロコガネ・センチコガネ・オホフタホシマグリコガネ・クロマルコガネ・カブトムシ

22 鋏 形 虫 科

クハガタムシ・ノコギリクハガタ・ヒメクハガタ・ヒラタクハガタ

23 吉 丁 虫 科

タマムシ・チハタマモシ・クロタマムシ・ケヤキナガタマムシ・アオマダラタマムシ

24 叩 頭 虫 科

シモフリコメツキ・クシコメツキ・オホナガコメツキ・サビキコリ・ヒメサビキコリ・コナガコメツキ

25 朽 木 虫 科

クチキムシ・オホクチキ・アカアシクチキ

26 長 朽 木 虫 科

ナガクチキムシ・ホソナガクチキムシ

27 蝨 科

ゲンジホタル・ヘイケホタル・チバホタル・ベニホタル・キクスヅダマシ・ヒメボタル・ヒメキクスヅダマシ

28 長 蠹 科

オホナガシンクヅ

29 地 膳 科

マメハンメウ・オホツチハンメウ・ヒメツチハンメウ

30 花 蚤 科

フタモンヒメハナノミ

31 擬 叩 頭 虫 科

コメツキモドキ

6 有 吻 目

1 椿 象 科

イネガメ・クロガメ・ナガメ・ブチヒゲガメ・イチモンゲガメ・トホシガメ・ウヅラガメ・クサギガメ・アオクサガメ・ハネナガアヲガメ・アカスヂガメ・エビイロガメ・トゲガメ・クヌギガメ・マルガメ・マルミラホシガメ・ヒトマルガメ・オホキンガメ・セアカツノガメ・キボシヒメマルガメ・コクロチガメ・チャイロガメ・シラホシガメ・アヲガメ・ルリガメ

2 縁 椿 象 科

ホソヘリガメ・オホヘリガメ・ハラヒロヘリガメ・ホオズキガメ・ハリヘリガメ・オホクモヘリガメ

3 長 椿 象 科

シロホシガイタ・ジフチガメ

4 星 椿 象 科

アカギホシガメ

5 盲 椿 象 科

フタモンメクラガメ

6 食 虫 椿 象 科

ヒメアカヘリサシガメ・ホソアカシマサシガメ・アカサシガメ・ヤニサシガメ

7 軍 配 虫 科

ナシグンバイ

8 タ ガ メ 科

タガメ・コオヒムシ

9 松 藻 虫 科

マツモムシ・コマツモムシ

10 丹 水 虫 科

マルミヅムシ

11 風 船 虫 科

フウセンムシ・コフウセン・ヒメフウセン

12 紅 娘 華 科

タイコウチ・ミツカマキリ・ヒメミツカマキリ

13 カ ワ グ モ 科

オホカワグモ・ヒメカワグモ・イトカハグモ

14 蟬 科

15 耳 蝉 科  
クマゼミ・ハルゼミ・チツチゼミ・アブラゼミ・ヒグラシ・ツクツクボウシ・ミンミンゼミ・ニイニイゼミ

16 泡 吹 虫 科  
ミミツク・コミミツク

17 浮 塵 子 科  
シロオビアワフキ・ホシアハフキ・マツアハフキ

18 白 蠟 虫 科  
イナツマヨコバヒ・ツマグロヨコバヒ・イネマダラヨコバヒ・ウスバヒメヨコバヒ

19 木 蝨 科  
カ・ベッコウハゴロモ  
テングスケバ・スケバハゴロモ・ツマグロスケバ・アヲバハゴロモ・トビイロウンカ・セジロウンカ・ヒメウン

20 <sup>アラムシ</sup>科  
<sup>アラムシ</sup>科  
ナシキジラメ・グミキジラメ

21 綿 虫 科  
ダイコンアブラ・トックリアブラ・ウタアブラ・ニハトコアブラムシ・キクヒゲナガアブラムシ・ムギヒゲア  
ラムシ・イモヒゲナガアブラ・クリオホアブラ・ウメコフキアブラ・バラヒゲナガアブラ

22 粉 蝨 科  
ヌルデオホイボフシ・ヌルデイボフシ・イヌフシヌルデハムシ

23 介 殻 虫 科  
ミカンコナジラミ・ミカントゲコナジラミ

7 蝨 目  
ワタフキカヒガラ・ヤノネカヒガラ・ルビールラムシ・クワカイガラ・アカマルカヒガラ・マルカヒガラ・カメ  
ノコロウムシ・イボタラウムシ・ヒムワタカヒガラ・ミカンコナカイガラ・ヒラカタカヒガラ

8 毛 翅 目  
アタマジラメ・コロモジラメ・ウシジラメ・ヒメウシジラメ・ウサギジラメ・ウマジラメ・ブタジラメ

1 トビケラ科  
ツマグロトビゲラ

2 河 石 蚕 科  
ヒゲナガトビゲラ

3 割 石 蚕 科  
スチエグリトビケラ

4 縞 虫 蚕 科  
トビイロエグリトビゲラ・エグリトビゲラ

クロシマトビゲラ

9 長 翅 目

1 擧 尾 虫 科

ヤマトシリアゲ・ベツカフシリアゲ・ホソマダラシリアゲ・キバネシリアゲ・オホシリアゲ・スカシシリアゲ

10 脈 翅 目

1 擬 蠟 螂 科

ヒメカマキリモドキ

2 蛟 蜻 蛉 科

ウスバカゲロウ・オホウスバカゲロウ・コウスバカゲロウ・ホシウスバカゲロウ・ゴマダラウスバカゲロウ

3 角 蜻 蛉 科

ツノトンボ

4 草 蜻 蛉 科

クサカゲロウ・ヨツボシクサカゲロウ

5 廣 翅 蜻 蛉 科

ヒロバカゲロウ

6 蛇 蜻 蛉 科

ヘビトンボ

11 直 翅 目

1 蝗 虫 科

ハネナガイナゴ・ナキイナゴ・ツマガゲロイナゴ・ツチイナゴ・コバネイナゴ・ダイメウバツタ・シャウリヨウバ

ツタ・キチキチバツタ・オンブバツタ・クルマバツタ・クルマバツタモドキ・セスチツチイナゴ・カワラバツタ

・イボバツタ

2 菱 蝗 科

ヒシバツタ・ツチヒシバツタ

3 コホロギ科

エンマコホロギ・クロコホロギ・ミツカドコホロギ・オカメコホロギ・マツムシ・マダラスヅムシ・スヅムシ・

カンタン・カナタタキ

4 蝻 斯 科

キリギリス・ヤブキリ・ウマオヒムシ・クツウムシ・イブキギス・ハネナガギス・ツユムシ・セスチツユムシ・

コバネサトキリ・クビキリバツタ・クダマキダマシ

5 穴 蝻 科

第9章 病虫害

6 蟋  
カマドウマ  
科

コロギス

7 竹節虫科

ナヽフシ・トゲナヽフシ・トビナヽフシ・エダナヽフシ

8 蠨螂科

カマキリ・オホカマキリ・ハラビロカマキリ

9 蜚蠊科

ゴキブリ・チャバネゴキブリ

10 ケラ科

ケラ

12 革翅目

オホハサミムシ

13 白蟻目

1 白蟻科

イヘシロアリ

14 □? 翅目

キカハゲラ・オホクラカケハゲラ

15 蜻蛉目

1 蜻蛉科

テフトンボ・ウスバキトンボ・シヤウジャウトンボ・オホキトンボ・ナンハトンボ・シオカラトンボ・シホヤト

ンボ・ミヤマアカネ・アキアカネ・トラフトンボ・ノシメトンボ

2 蜻蛉科

ギンヤンマ・オニヤンマ・サナエトンボ・カトリヤンマ・ウチハトンボ

3 豆娘科

モノサシトンボ・アオイトンボ・ヨツネイトトンボ・キイトトンボ

4 河蜻蛉科

カワトンボ・ハグロカワトンボ・ヤナギカワトンボ・アオハダカトンボ

春の一匹、秋の万匹、実に病虫害ほど恐しいものはない。而もその病虫害のいかなるものであるかを知らず、如何にして防ぐべきかを知らぬ程冒險なるものはない。かくの如く最も重要な関係を有するものに対して我々は甚だ無関心であった。他の調査にしても此土地の病虫害を系統的に研究したるものは甚だ少ない。こゝに農事試験場園藝分場小林源次先生に御依頼して左の如きものを作製したわけである。

## 本村作物

### 1 普通植物

#### 1 稲

・にくわめいちう・ひめとびうんか・とびいろうんか・にじろうんか・つまぐるよこばい・いねのくろかめむし・いねのこあおむし・けら・いちもんぢせり・たてはまき・きりうじががんば・いなご・いねかめむし・あはよとう

・稲熱病・胡麻葉枯病・萎縮病・稻麴病・紋枯病・苗綿腐敗病・馬鹿苗病・小粒菌核病

#### 2 麥

・いねのこめつきむし・けら・つまぐるよこばい・あはよたう・むぎもぐりばへ

・裸麥穂病・銹病・斑葉病・五立枯病・白渋病

#### 3 粟

・あはのめいちう・あはよとうむし・あをがめむし・つまぐるよこばい

・さゝら病・黒穂病・いもち病・赤渋病

#### 4 きび

・いねよたうむし・あはのめいが・かぶらやが・きびくびれあぶら

・黒穂病・いもち病

#### 5 たうもろこし

・もゝのしんくひ虫・あはのめいが・かぶらやが・きくびれあぶら

・黒穂病・銹病・ペト病

#### 6 貯穀の害虫

・こくぞう・おほこくぬすと・のこぎりこくぬすと・もみながしんくひ・いってんこくが・ばくがあづきぞうむし

### 2 特用植物

#### 1 大豆

・ひめこがね・こふきぞうむし・まめはんめう・まめしんくひ・はらびろがめむし・まめどくが・まめのこがね・まめまだらめいが・ほそへりかめむし

2 小豆  
・萎黄病・斑紋病・紫斑病

・あづきぞうむし・まめのあぶらむし・あづきがめむし・あづきさやむしが・まめのめひが・まるがめむし  
・炭疽病

3 除虫菊

・こめつきむし  
・萎縮病・立枯病

4 桑

・くわのかひがらむし・くわかみきり・くはのひめぞうむし・くわのしんとめたまばひ・きんけむし・くわのめいが・しわきじらみ

5 茶

・紫紋羽病・胴枯病・膏薬病・白渋病・赤渋病  
・ちゃけむし・ちゃみのむし・ちゃのおほはまき・ちゃのまるか・ひがらむし・つちろうむし  
・赤葉枯病・白斑病・煤病

6 ハブ茶

・ひめこがね・どうがねぶんぶん

7 蕺 苔 (白菜類に属するもの多し)

・斑点病・褐紋病・菌核病 蕺

8 紫雲英

・まめのあぶらむし  
・菌核病・白粉病

9 甘蔗

・いねよたうむし・いなご・だいめうばった  
・浮塵子類 (大要稲と同じ)・黒穂病・露菌病

### 3 蔬菜

1 根菜類

a 大根

・もんしろてう・はいまだらのめいが・だいこんあぶらむし

b 白菜類

・さるはむし・かぶらはばち・なが免<sup>?</sup>・なのめいが・よたうが・かぶらやが・たまなやが・だいこのみはむし・  
きすじのみはむし  
・ペト病・白菜病・白斑病・腐敗病・立枯病

c 人 参

・にんじんのめむし・きあげは・むらさきがめむし

・腐敗病・斑点病・褐斑病

d 牛 蒡

・ごぼうのはまきもどき・ごぼうざうむし・くさぎがめむし・ごぼうぎんすじはまき

・黒斑病・白洪病

e さつまいも

・なかじろしたばいもこが・とっくりあぶらむし・えびがらすどめ

・紫紋羽病・根腐病

f じゃがいも

・おほにじうやしてんとうむし・にじうやほしてんとうむし・よとうが・とっくりあぶらむし・かぶらやが

・疫病・萎縮病・腐敗病

g さと いも

・せすじすゝめ・いもあぶらむし・いっぽん

・腐敗病・斑紋病・疫病

h やまねいも

・やまねいもはむし・こほうぎ

・斑点病・炭疽病

i 百 合

・ねだに

・立枯病・炭疽病・鏽病

j く わ い

・くわいのあぶらむし・きりうじがゞんぼ

・斑紋病

k 蓮

・はすもんよとう・くわいくびれあぶらむし

・腐敗病

## 2 葉 茎 菜 類

a 竹 の 子

・はざまちくば

b う ど

・うどのはまきむし・ひめしろぞうむし・しらほし・かめむし

- ・褐紋病
- c アスバラガス
- ・きあげは
- ・銹病・茎枯病・炭疽病
- d ちしゃ
- ・ペト病・葉枯病
- e ほうれんさう
- ・ペト病・炭疽病
- f しゅんぎく
- ・きくあぶらむし
- ・腐敗病・炭疽病
- g ふき
- ・ふきのずいむし・あわのめいちゅう・ふきばった
- ・白星病・黒斑病・銹病
- 3 葷 辛 類
- a ねぎ
- ・ねぎのむくげむし・はすもんよたう・ひなばった・たまなやが・かぶらやが
- b 玉ねぎ
- ・青銹病・ペト病・葉枯病
- ・けら・ひなばった・なまなやが・かぶらやが・みつかどこほうぎ
- ・黒穂病
- c みつば
- ・銹病
- d せり
- ・白星病・紋点描
- e しそ
- ・銹病・萎縮病
- f しやうが
- ・あはのめいちう
- ・腐敗病・いもち病
- g みょうが
- ・かうもりが
- h とうがらし

#### 4 果 菜 類

・炭疽病・白星病・斑点病・黒黴病

##### a 瓜 類

・うりはむし・うりめいが・たねばい・よたうむし・とっくりあぶらむし

・炭疽病・ベト病・蔓割病

##### b ゆうがほ

・うりはむし

##### c 茄 子

・かぶらやが・たまなやが・おほにじうやほしてんとうむし・にじうやほしてんとうむし・ほゞづきがめむし・

とつくのあぶらむし

・青枯病・立枯病・綿疫病・褐点描

##### d と ま と

・とっくりあぶらむし・ほゞづきがめむし・なすのめくらがめむし

・黒斑病・腐敗病・白星病

##### e い ち ご

・いちごぞうむし・ばらのかひがらむし・うすばひめよこばひ・いちごがめむし

・斑葉病・葉枯病

#### 5 莢 実 類

##### a いんげんまめ

・ひめこがね・どうがねぶんぶん・まだらとりば・まめひめよこばひ

・銹病・角斑病・炭疽病

##### b う づ ら 豆

・うらなみしじみ

##### c え ん ど う

・よたうむし・ほそへりがめむし・よとうが・まめぞうむし・えんまこほろぎ・えんどひげながあぶらむし

・炭疽病・褐斑病・白洪病・弥地病

##### d そ ら ま め

・まめなあぶらむし・そらまめぞうむし

・銹病・ベト病・褐斑病

#### 6 菌 類

##### a 松 茸

・きのこばひ・なめくじ  
b 椎茸

多数に付略

#### 4 果 樹 類

##### 1 か ん き つ

・いせりやかひがらむし・るびろうむし・ほしかみきり・みかんはむぐりむし・みかんのなかかきかひがらむし・みかんのまるかひがらむし・まるくるほしかひがらむし・こんまかひがらむし・あげは・みかんのはまきむし・みのむし・あをばはごろも・こあをむぐり・あかだに・さびだに

・潰瘍病・褐色小円星病・煤病・褐色腐敗病・裂果病・炭疽病・裾腐病・樹脂病・斑葉病・黄斑病

##### 2 柿

・いらむし・かきのみむし・かめのころうむし・つのろうむし・ぢやのかひがらむし・なしのくろかきかひがらむし・きのかわが・かきのこながひがらむし

・角斑性落葉病・円星性落葉病・炭疽病・黒星病・根頭瘤腫病

##### 3 栗

・くぬぎかみきり・くすさん・くりのみむし・くりのみぞうむし・くりあまだらあぶらむし

・胴枯病・斑点病

##### 4 梨

・さんほしげかいがらむし・なしのるりかみきり・なしじらみ・ぐんばいむし・ほしけむし・なしのしんくひ・なしひめしんくひ・なしのみばち

・黒斑病・赤星病・黒星病・輪紋病・褐斑病

##### 5 葡 萄

・ふいちきせら・ぶどうすかしば・ぶどうとらかみきり・ひめこがね・まめこがね・どうがねぶんぶん

・黒痘病・炭疽病・鏽病

##### 6 李

・うめけむし・もんしろしやちほこ・ひめこがね・もゝのしんくひ・もゝのひめしんくひ・たまがたかひからむし

・すもゝはまき

・日焼病・黒斑病

##### 7 水 蜜 桃

## 第二編 人文的方面

### 第一章 人口

#### 1 現在人口

戸数 二八〇

男 七九一人

#### 8 梅

- ・もゝのしんくひ・もゝぞうむし・もゝはまきあぶら・こすかしば・うすえぐりば
- ・炭疽病・細菌性穿孔病・樹脂病

#### 9 櫻

- ・うめのけむし・うめしやくとり・くわかひがらむし
- ・黒星病・斑点病

#### 10 菊

- ・くわかひがらむし・ぐんばいむし・もんしろしやちほこ・うめけむし・もゝすゞめ・さくらこがね
- ・天狗巢病・穿孔病・銹病

#### 11 竹

- ・きくあぶら・きくすひかみきり・よもぎはむし
- ・うどんこ病・黒銹病・褐銹病・斑点病

#### 12 松

- ・たけのふくろかひがらむし・たけのほそくろば・ほじきくちば・いちもんどせゝり
- ・竹蓐病・天狗巢病・斑点病・煤病

#### 13 杣

- ・まつのこなかひがら・まつけむし・まつはまき・まつのこしんくい・まつのはばち・かみきり
- ・葉枯病・銹病・癭瘤病
- ・すぎどくが・すじこかね・くろこがね
- ・赤枯病・癭病

女 七〇九人  
計一五〇〇人

2 部落人口戸数調査  
昭和七年度

部落	戸数	男	女
熊野	六六	一七二	一六四
岩内	五〇	一三八	一一三
下野口	五七	一五〇	一四三
上野口	六〇	一七〇	一六九
北野口	四七	一四一	一二〇
計	二八〇	七九一	七〇九

3 本村職業別戸数

部落	農業	商業	農兼工	農兼商	官公吏	其他
熊野	六〇	〇	二	二	〇	一
岩内	四四	二	三	〇	〇	一
下野口	五二	〇	一	一	〇	二
上野口	四二	二	二	一	〇	〇
北野口	五〇	二	二	〇	〇	〇
計	二四八	六	一〇	四	一	四

4 出生及死亡 但 昭和七年度は九月卅日現在とす

要項／年度	昭和2	昭和3	昭和4	昭和5	昭和6	昭和7	計	年平均
出生	七一	五二	四一	五八	五七	四五	三二四	五六
死亡	二三	一八	三四	一六	二二	一四	一二七	二二

5 婚姻及離婚 但し昭和七年度は九月卅日現在

要項／年度	昭和2	昭和3	昭和4	昭和5	昭和6	昭和7	計	年平均
婚姻	三六	二〇	二〇	二八	三九	一六	一六八	二九
離婚	〇	三	二	三	四	〇	一二	二

6 徴兵検査累年比較表

第二章 運輸及交通

1 道路

イ種類延長（單位 米）

7 戸数と一戸当たり人口

要項／年度	昭和2	昭和3	昭和4	昭和5	昭和6	昭和7	計	年平均
甲種	六	四	五	七	四	五	三一	五・五四
乙種	二	二	一	〇	四	一	一〇	一・八八
丙種	四	四	九	八	五	五	三五	六・二五

戸数	一戸当たり人口	
	最大	最小
二八	一六	一
人口	平均	四

口分布状況（交通圖参照）

幅員	縣道	村道	里道	計
二間		四七七・七三		四七七・七三
九尺	三四四・三七m	七五八・一九		四二〇・五六
七尺		九三七・〇〇		九三七・〇〇
七尺以下		二三五・九〇	八四〇・〇〇	三一〇・九〇
計	三四四・三七m	八八一・八二	八四〇・〇〇	一三一〇・一九

地形上から道路は、西北に発達し東南に疎なり。縣道丙号線河南・龍神線は東西に岩内・熊野を貫通し、村道御坊・野口線、丹生・藤田線北部貫通各幹線をなす。

ハ修繕

村道 年に二度字民出役して修繕す

縣道 修繕工夫一人

ニ橋梁

縣道 一 鉄筋コンクリート

村道 一 木橋・三 土橋

2 運

イ 鉄 道

紀勢線は北東丹生村・矢田村を走り、本村輸送物は主として丹生村和佐駅による。本村は同駅配達区域内にあり、然れども北部・西部村民は多く道成寺駅・御坊駅を利用する者多し。

停車場位置

駅名	孝校より	熊野より	岩内より
和佐駅	三一〇九m	二四一〇	三六九七
道成寺駅	一九三五	三〇三五	三八六二

旅客運賃表（和佐駅より）

田 辺	五七	紀伊由良	二二	紀三井寺	八八	阪和天王寺	一九二
芳 養	四九	紀伊湯浅	三八	東和歌山	九六	大 阪	二〇〇
南 部	四一	藤 並	四三	和 歌 山	九九	京 都	二六六
岩 代	三三	紀伊宮原	四九	和歌山市	一〇〇	名 古 屋	四三四
切 目	二四	養 島	五七	粉 河	一三一	東 京	七五五
印 南	一九	下 津	六四	橋 本	一五八	神 戸	二五四
稻 原	一一	加茂郷	六九	奈 良	二四五	下 関	七五〇
道成寺	八	日 方	七八	南海難波	一九六		
御 坊	一〇	内 原	一五				

貨物運賃表

貨物	一貨車 (8 t)		蜜柑箱 (22.5 kg)		特 別 小		生 活 必 需 品	
	一	二	一	二	一	二	一	二
地名	一一	二二	〇	二〇	三	〇	三	〇
田 辺	一一	二二	〇	二〇	一	〇	一	〇
和歌山	一一	二二	〇	二〇	一	〇	一	〇
大 阪	五五	一一〇	〇	四〇	一	〇	一	〇
神 戸	六〇	一二〇	〇	四〇	一	〇	一	〇
京 都	六〇	一二〇	〇	四〇	一	〇	一	〇
名古屋	七三	一四六	〇	五〇	一	〇	一	〇
東 京	一一〇	二二〇	〇	五五	一	〇	一	〇

備考 特小は目方により差あれども、特にこの二種目を出す。神戸は最も安い所をとる  
配達賃及取扱賃は

30 kg まで十銭……配達賃  
// 五銭……取扱賃

旅客所要時間（午前六時〇四分上り全六時二〇分下りにて発車して要する時間）

目的地	時間	目的地	時間
田辺	五九分	和歌山市	一時間四〇分
南部	四九分	道成寺	七分
印南	二〇分	御坊	一二分
稲原	一二分	由良	二六分
箕島	五九分	湯浅	四〇分
東和歌山	一時間四〇分	日方	一時間二三分
和歌山	一時間四四分		

口自動車

1 定期自動車

- ・トラック 一往復 川中線（御坊中央自動車）
- ・旅客 一往復 全（御坊南海自動車）

2 運賃（小学校を起点とす）

旅客

目的地	定期	賃切
御坊	三〇銭	一円五〇銭
和佐	二〇銭	

貨物

目的地	一台賃切	米一俵
御坊	二円五〇銭	十銭
和佐	二〇〇	八銭

3 村内所有乗物数

- ・自轉車 二一一
- ・リヤカー 六一
- ・荷車 三九
- ・馬車 六

・馬

- 軍馬 二八
- 乗馬 一
- 荷馬 四
- 小馬 一

・舟

- 私有 三六
- 水利組合 二
- 渡舟 一

八郵便電信電話

局名	孝校より	熊野より	熊野より
御坊局	四五六八m	三八五五	二五六八
藤井局	一一五九	二二五九	三〇八六

郵便集配の回数

三等郵便局御坊局の区域にして午前中一度集配

第三章 教育

1 小孝校沿革

本校創立

明治九年六月二十三日成仁小孝校と称し安樂寺を假校舎とす。通孝生徒は野口のみなり。明治十七年十月町村立小孝校設置区域及校数等改正せられて、本校は藤井村の分校となる。明治二十年四月野口簡易小孝校全二十一年八月廿一日の暴風雨に至り、倒壊家屋数十の多きに達し近年希有の暴風、明治二十二年四月一日野口・熊野・岩内合併して野口村となる。全八月二十二日大洪水あり。この天災の爲諸般の事業大ひに萎靡し挽回又容易ならず。就中教育事業の如き殆ど顧慮する違なく休校二ヶ年余り。校具・諸記録等流失多く、実に教育上の大障害をなす。明治二十四年四月野口村尋常小孝校休業中とて職員なし。明治二十六年十二月校舎を法林寺に移す。明治二十九年五月野口村小孝舎買入、大字野口西光寺三〇九番地に起工、十一月落成移轉す。明治三十年九月二十二日御眞影奉迎新築移轉式。明治四十一年八月十二日増築工事着手、全四十二年三月落成。明治四十三年六月二十一日古刀（銘兼房）一口及楠氏遺品寫真一軸寄贈さる。大正二年四月一日裁縫孝校附設す。大正五年四月一日裁縫孝校を閉ず。大正六年十月十九日今上陛下御尊影奉迎、大正九年一月増築起工、全十年二月落成。大正十年四月高等併置野口村尋常高等小学校（現在）。

○歴代の校長左の如し

藤田 秀次郎	明治二十九年	一月卅一日より	明治三十五年	四月三十日に至る間
濱中 寅松	全 三十五年	四月三十日	全 三十九年	五月二十八日
村山 英華	全 三十九年	九月二十三日	全 四十一年	十一月十八日
葛葉 隆	全 四十〇年	十一月十八日	全 四十三年	十一月十五日
山東 敏二郎	全 四十一年	四月十五日	全 四十三年	十一月八日
葛城 邦長	全 四十四年	二月十四日	全 四十五年	三月三十一日
中洲 宗吉	全 大正三年	三月卅一日	全 大正五年	三月三十一日
野尻 績	全 大正五年	三月三十一日	全 大正八年	三月三十一日

①校地・設備・建物

丸山 乙松	全	八年 三月三十一日	昭和 十年 三月三十一日	昭和 十年 三月三十一日
依岡 信一郎	全	十年 三月三十一日	昭和 四年 三月三十一日	昭和 十年 三月三十一日
佐竹 義一	昭和	昭和 四年 三月三十一日	赴任	昭和 十年 三月三十一日

②生徒に関する調査

イ 幸令児童就幸状況

内		校舎敷地		校地総坪数		生徒一人当	備考
実習地	附屬	温室	農舍	堆肥舍	畜舍		
五五五〇	六〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	二九〇	二〇〇	教室・職員室・便所等
九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	
実習地内						九一〇	九一〇

ロ 幸級児童数及教員配置状況

年度	尋常科修業者中		高等科就学者中		不就幸者		合計
	男	女	男	女	猶豫	免除	
大正十四年	一一三	一一二	二〇	一七			二七二
十五年	一二七	一一六	二九	一六			二八八
昭和二年	一二七	一一五	二五	二四			二九一
三年	一二八	一一二	二二	二二			二九三
四年	一二六	一一三	三五	二一			三〇五
五年	一〇一	一一一	三三	二八			二七三
六年	一一一	一一二	二四	三一			二九八
計	二三五	二四三	一七	三七			二九八

幸級	幸年	児童		資格	本校勤続年月	氏名	備考
		男	女				
一	尋一	一五	二三	小正	二年五ヶ月	永田 一雄	実業教員養成所卒
二	尋二	一六	二二	"	五ヶ月	原 利子	師二卒
三	尋三	二四	二〇	"	三年五ヶ月	佐竹 義一	幸校長 師二卒
四	尋四	一九	二五	代用	九月一日就職	五味 英	東洋大幸卒業
計		三八	四四				

八児童成績（昭和七年九月現在）

計	七	六	五	幸級	幸年	幸級	幸年	男	女	計	資格	本校勤続年月	氏名	備考
一四三	一一	一九	一六	二二	三八	小正	五年五月	岩崎 忠一	實業教員養成所卒	師一卒	全右	師二卒	中村 ひさゑ	玉置 鍊太郎
一四九	二〇	四一	三九	三〇	三九	休職	一年五ヶ月	中村 ひさゑ	師一卒	師一卒	師一卒	師一卒	中村 ひさゑ	玉置 鍊太郎
二九二	二〇	四一	三九	三〇	三九	休職	一年五ヶ月	中村 ひさゑ	師一卒	師一卒	師一卒	師一卒	中村 ひさゑ	玉置 鍊太郎

二健康状態

種別	強	中	弱	富	中	貧	百分比
優良児							
中等児							
不良児							

高	尋	尋	尋	尋	尋	尋	尋	尋	幸年
一	六	五	四	三	二	一	一	一	男女
女	男	女	男	女	男	女	男	女	平均身長
一三〇〇	一三六三	一二四五	一二二二	一一五三	一一八九	一一七六	一〇七八	一〇七	平均体重
三〇	三〇	二六	二四	二〇	二二	一九	一七	一七	平均胸囲
四〇六	九二八	一〇	八五五	九七〇	九九七	〇四	三三	五五	眼疾アル者
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	耳疾アル者
六四九	六六二	五八一	六四四	五九一	五八八	五七二	五七二	五七二	ウミアル者
一	八	五	二	四	六	五	四	三	甲
二	四	二	四	二	三	二	五	四	乙
九	一四	一五	一五	一八	一九	二	七	九	丙
七	五	三	四	五	四	七	二	六	評

2 義務教育以外の孝校教育

高年	孝年		平均身長	平均体重	平均胸囲	眼疾アル者	耳疾アル者	ウミアル者	概評		
	男	女							甲	乙	丙
二	一・三七〇	一・四一〇	三〇・六〇〇	三六・九八三	〇・七一一	一			三	〇	甲
									四	五	乙
									二	六	丙

イ 高等科入孝数及尋常科卒業生に対する割合

年 度	性別		尋常科卒業生数	高等科入孝者数	入孝の歩合	備 考
	女	男				
昭和四年度	二二	二二		一七	六三%	
昭和五年度	一七	一六		一〇	九五%	
昭和六年度	二七	二七		二四	七八%	
	二三	二七		一八	七八%	

ロ 中等孝校入孝者数

年 度	中 孝 校		女 孝 校		其 他		備 考
	昭和三年度	昭和四年度	昭和五年度	昭和六年度	一農孝校	一農孝校	
昭和四年度	一	二	一	一	一農孝校		
昭和五年度	四	一	一	一	一農孝校		
昭和六年度	三	二	一	一	一農孝校		

ハ 卒業後の状況

- ・昭和七年三月尋常科卒業五〇名中
  - 1 中等孝校に入孝せる者 五名
  - 2 高等科に入孝せるもの 四一名
  - 3 家事に従事せるもの 二名
  - 4 就職せるもの 二名
- ・昭和七年三月高等科卒業二十九名中
  - 1 農孝校へ入孝せるもの 一名
  - 2 家事に従事せるもの 一〇名
  - 3 就職せるもの 一一名
  - 4 未就職者 七名

3 農業補習学校

イ 沿革

明治四十年五月十九日創立。野口村立附設農業補習学校と称し、野口村小学校に附設し、就学区域は小学校に同じ。修業年限は二ヶ年とす。明治四十一年十月十六日本村青年会設立するや、本校を小学校に分教場を各支会に於く。其の後青年会改造と共に分教場を熊野・岩内の二ヶ所とす。大正九年四月より年限を延長し、豫科二年・本科四年・研究科二年の八ヶ年とす。大正十年四月より毎月二日間本校に於いて統一教授をなし、大正十一年度より幸則を新令に準じて変更し、前期二ヶ年後期三ヶ年となし教授日数を増し、毎月月夜一週間を本校に於いて統一教授をなし、他は月水禽本校及分教場二ヶ所に於いて教授し、漸次統一気分を作り大正十三年四月より分教場を廃して全く統一現在に及ぶ。

ロ 幸科目及教授時数・教授季節及日数

合計	普通科				科 目	豫科	本科	研究科
	実業科	地歴・理科	算術	国語				
	農業	地歴・理科	算術	国語	修身・公民			
二五六	六〇	三六	六〇	七〇	三〇			
二五六	七〇	三六	六〇	六〇	三〇			
二五六	一六〇		二〇	二〇	五六			

○ 修業年限

豫科二年 本科三年 研究科三年

○ 教授時数

一ヶ年間 二七〇時

○ 幸科課程表

幸科	豫科	本科	研究科
修身・公民	道德の趣旨・公民の心得	同上	同上
国語	講讀・作文	同上	同上
数学	実用数学	同上	同上
地学歴史	日本歴史・日本地理	外国地理・外国史	
理科	日常生活に必須なる事項	同上	
農業	地方農業に適切なる事項	農業（コレハ豫科）	種藝・園藝・養蚕・農経
教練・体操	普通体操・教練	同上	同上

八生徒数

豫科一四人 本科一三人 研究科一人

二就学・出席の状況

1 就学状況 最近三ケ年 一〇〇%

2 出席状況 " 九六・〇三%

木生徒卒業後の状況

卒業生総数 九六人 自宅農業 八〇名 他出者 一六名

へ設

1 教授用設備 掛図・実験器具、器械・薬品等一式

2 実習設備

① 学校実習地

三反六畝

蔬菜園 一反八畝

果樹園 六畝

水田 一反二畝

② 部落実習地

五部落 五畝歩宛

③ 委託実習地 果樹園 一反歩

3 建物

① 農舎 農具及作業室 六坪

② 倉庫 一坪半

③ 堆肥舎 三坪

④ 鶏舎 三〇坪

⑤ 豚舎 三坪

⑥ 温床 二框

⑦ 農具 各人使用出来ルダケ

⑧ 温室 六坪

ト経費 昭和七年度豫算 二六〇円

于教授訓練の施設

1 教授上の施設事項

① 教授細目 ② 指導案

④ 揭示教育 ⑤ 辨論会・討論会 ③ 成績考査

⑥ 青年文庫

2 農業実習上の施設事項

- ① 研究発表会
- ② 肥料試験
- ③ 品種試験
- ④ 品評会
- ⑤ 米作増収品評会
- ⑥ 見幸及視察
- ⑦ 豊年会
- ⑧ 販賣実習

り訓練上の施設

1 国家的施設

- ① 祝祭日・記念日の儀式舉行

- ② 御眞影奉安殿への最敬礼

- ③ 入隊兵の歓送迎

2 自治的訓練

- ① 孝級自治會

- ② 部落通孝團

3 宗教的訓練

- ① 宗教的講話會

- ② 神社・寺院参拝

- ③ 靈場参拝

又各種団体との連絡関係

1 青年訓練所との関係

補習学校の職員は全部訓練所の職員たり。又生徒は殆ど訓練所の生徒なるが故に二身一体なり。

2 青年会との連絡

① 職員は全部青年会の顧問となりて、相談役となり又生徒は全部青年團員たり。

② 青年團役員に補習学校の就孝出席の督勵の委託

③ 各種の事業は合同で行ふ

3 農會との連絡

① 農會と一致して村の農業改良に努力す

② 農會の実行事項は先ず生徒から実行せしむ

③ 品評会・講習会は合同で行ふ

ル季節及日数

月次	日数	月次	日数
九月	一六	三月	一四
八月	一五	二月	一五
七月	一五	一月	一四
六月	一二	十二月	一六
五月	一四	十一月	一六
四月	一四	十月	一二

才教員及受持科目 (昭和七年十月現在)

山本 侃二	教諭専任	農業	昭和七年十月	千葉高等園芸学校
五味 英	"	国語	昭和七年九月	東洋大李倫理文学科
玉置 鍊太郎	"	数	昭和六年四月	師範二部
敷内 作一	"	地理・歴史	昭和六年四月	師範二部
岩崎 忠一	助教諭	農業・理科	昭和七年四月	全
永田 一雄	教諭	農業	昭和五年四月	実業教員養成所
佐竹 義一	教諭兼校長	修身・公民	昭和四年四月	師範二部
氏 名	職 名	担任孝科	任命年月	卒業学校

4 各種団体

イ 水利組合

a 組合員数及区域

現在組合員数	一七五	区域内総戸数	一五五	全上総人口	七八〇
--------	-----	--------	-----	-------	-----

b 歳入出豫算

・ 歳 入

費 途	組合費	反別割特別税	其他の収入	計
	田 九二町歩 一反二付二円	一八四〇円	預金利子 一八円 要品賣却代 三円 前年度繰越金 五円 一〇円	一八五八円

・ 歳 出

科目	本年度豫算額	前年度豫算額	比較	摘 要
管理費	一六九〇〇	一六九〇〇		給料・雑給・旅費・需要費
会議費	一四〇〇	一四〇〇		費用辨費・需要費
事業費	*一六〇〇〇	一六〇〇〇		水路修繕費・同浚渫費・ポンプ運搬費・監督費
豫備費	七五〇〇	七五〇〇		(*一六〇〇?)
計	一八五八〇〇	一八五八〇〇		

口農 会

a 経 費 一〇六六円（昭和七年度）

b 役 員 会員数 三〇〇名

会 長 一名

副 会 長 一名

幹 事 一名

昭和七年度野口村農会事業方法

- 1 桑樹栽培講習会を開催、桑の品質及増収を圖らんとす。
- 2 稲作肥料講習会を開催、合理的施肥觀念の徹底を期す。
- 3 米増収競争をなし、米の増収を圖らんとす。
- 4 米・麥採種園を設置し、品質の改良を圖らんとす。
- 5 出荷組合の活動を督勵し、農作物の販賣を改善せんとす。
- 6 自給肥料を督勵し、金肥の節減を圖らんとす。
- 7 産米生産者に対し、票箋の無償交附をなし、一定を期せんとす。
- 8 引続き技術員を設置し、農業の改良発達を圖らんとす。
- 9 早熟蔬菜を奨勵し、農家經濟の充實を期す。
- 10 優良農村を視察せしめ産業の發達を期す。

八養蚕実行組合

a 目 的

農産業に関し組合員の利益増進を圖るを以て目的とす。

b 事 業

- 1 養蚕の指導奨勵
- 2 掃立蚕種の統一
- 3 蚕種の共同購入、共同貯蔵及共同催青
- 4 稚蚕の共同飼育
- 5 稚蚕の共同飼育所、稚蚕共同桑園の設置
- 6 桑園の改良
- 7 産繭の共同販賣
- 8 養蚕に関する必需品の共同購入
- 9 蚕病又は桑樹病虫害、凍害の豫防駆除

- 10 違等災害等の共済及共済資金の積立
  - 11 基本財産の造成
  - 12 備荒貯蓄
  - 13 講習会、講話会の開催
  - 14 前各号の外組合の目的を達するため必要なる事業
- c 役員、職員、會員数

理事 七名（理事中より會長一名を互選す）  
監事 五名  
會員数 一五〇名

## 二信用組合

野口信用組合、熊野信用組合の二組あり

### a 役員、會員数

理事一五名 監事九名 評定員一九名

### b 事業

- 1 本組合の事業年度は暦年度とす
- 2 本組合に余裕金ある時は、産業組合中央金庫・信用組合聯合会又は總會の承認をへたる銀行に之を預け入れるものとす
- 3 事業執行に関する細則は理事之を定む

### ① 信用

- 1 組合員より貸付の請求ありたるときは、理事は信用程度表及貸付金の用途を調査し、其の金額及貸付方法を定むるものとす
- 2 理事貸付をなす場合に於て必要と認むる時は、組合員をして保証人を立てしめ又は担保を共せしめる事を要す
- 3 貸付金の辨済期限は一ヶ年内に之を定む
- 4 理事は貸付金使用の概況を監査し、貸付の目的に反するものありと認むるときは期限前と雖も辨済をなさしむことを得
- 5 貯金の取扱は一口拾錢以上とす
- 6 貸付金及貯金の利率は左の期限内に於て理事之を定む  
イ 貸付金に付ては年一割以下  
ロ 貯金に付ては年六分五厘以下

### ② 購買

1 本組合に於て賣却するもの

イ肥料・農具

ロ其他總會の決議を経たるもの

2 理事は組合員の需要を調査し、注文に応じ物品を買入れるべきものとす

3 組合員は理事の承認をへるに非れば、本組合に於て取扱ふ物品を組合外より組合より購賣する事を得ず

4 賣却すべきものゝ代價は市價を標準として理事之を定む

5 組合員は購賣物品引取と同時に其の代金を支払ふ事を要す

## 木青 年 會

### 沿 革

明治四十一年十月設立。野口村青年會と稱し、事務所を小孝校に置く。初代会長は村長中村政市氏にして歴代村長若しくは校長が會長を繼承し來りしが、大正十年一月に至り上野口坂口三郎氏會長となり実務は副會長校長依岡信一郎氏専ら之に當たる。大正十四年二月熊野大谷烈高會長に選ばれ、同時に事務所を村役場に移す。昭和二年大谷列高再選、全四年辞任につき下野口林松二氏會長就任、同六年再選現在に至る。此の間明治四十四年補習教育の施設よろしきの故を以て、時の文部大臣小松原英太郎氏より表彰せられたるを始として、其他火災・水害等に際し盡力せるかどにより縣知事或は郡長より表彰或は感謝状を受けたる事頗る多し。昭和二年野口村青年會を野口村青年團と改稱す。

現在會員數 正會員五六名 客員一三名

### 事業

村内道路修繕奉仕

冬季夜警

視察見幸旅行

各支部對抗競技大會

優良青年表彰

弁論大會開催

## へ 婦 人 會

### 沿 革

大正九年九月一日本村在住の婦人全部を以て婦人會を設定し、処女部・主婦部の二部に分つ。校長依岡信一郎氏を會長に藪内ツル工氏を副會長に推戴。昭和三年四月藪内副會長家事都合に依り辞職。全年四月岡本タネ氏を副會長に推す。昭和四年四月依岡會長轉任につき、後任校長佐竹義一氏を會長に推戴す。

### 事業

各支會毎月一回例会を開き、講演會・講習會・雜誌後讀をなす。  
毎年一回四月遠足 敬老會

### 役員及會員

會長一名（小孝校長） 副會長一名 支會長一名 幹事一四名

顧問一五名

會員三七三人

### 第四章 村治

#### 1 歴代村長

伊藤 弥十郎	明治二二年	四月二〇日	明治二三年	三月二〇日
鈴木 立庵	二三年	四月二日	二四年	四月二日
古谷 久三	二四年	五月二三日	二八年	八月二八日
亀井 文太郎	二八年	一月二日	二九年	一月二〇日
木村 大次郎	二九年	一月八日	二八年	二月二日
中村 政市	三八年	四月八日	四四年	七月一日
坂口 政市	四四年	一月三日	大正	一月二八日
坂口 藤楠	大正	二月七日	六年	二月二八日
藤田 留吉(玉置)	一〇年	五月三〇日	現	在

#### 2 村会議員氏名及大字別

上野口 橋本 秀松	坂口 梅吉	坂口 三郎	三名
下野口 佐竹 高四郎	川口 岩松		二名
北野口 大田 岩吉	前 歌市		二名
岩内 桶谷 榮太郎	田端 茂助		二名
熊野 井谷 常吉	中村 文吉	古谷 楠太郎	三名

### 第五章 神社宗教

#### 1 神社

##### イ 熊野神社

野口村大字熊野南谷にあり、祝家の傳に往古塩屋浦の海中より出現まし、熊野權現と稱し、本國熊野權現の旧蹟にして本社十二社・末社四十社・境内方八町・神主一人・禰宜七十五人・神子十人・神馬七十五匹・銚七十五本あり。社殿も莊麗に神領も多く、祭礼には神輿牟婁郡田辺莊の鼻と云ふ所に渡御するの例にて、其の式莊嚴を極めたりと云ふ。愛徳山縁起に「南海道淡路国由津留波山一宿次皇城南紀伊国富浦富島暫息給云々」と見え、富島は塩屋のそれと覚しく当社地は同島に程遠からねば、出雲の熊野社を勧請するとき暫くこゝに鎮座ありしと思はる。牛の鼻へ渡御すると云ふも、右勧請の際の古例を傳へたるものと思はる。近古世乱れて社殿荒廢し、社殿十二社を遂に合祀して四社とす。續風土記に「本神社、一御前社、大和御前社、大宮右四社合せて熊野權現といふ」とあるもこれなり。この四社境内相連りしに回録に罹りし後、大宮獨り区域を別つ。即ち享





口樹木傳説

○鳶松

昔日高川に大洪水のあつた時一羽の鳶が命からがら野口山の頂へのがれた。そしてしばらくあたりの物すごい有様に見とれてゐたが、ふとどこかへ飛んで行きたくなり立たうとすれども足が地についたまゝ身動きも出来ぬ、ビーンヒヨロヒヨロと悲しんでもがけばもがくほど不思議に足が地に吸ひこまれて行く、段々弱つて声もかすれ遂に化して松の木になつてしまつた。今の鳶松は即ち之であるといふ。

○山田莊異聞（一名熊野谷大蛇の由来）

昔紀伊国日高郡山田莊の山奥に大蛇あり。時々里に現れて畑作を害し、人を損かこと再三。里人大ひに困却せり。たまたま荒山三郎長政、荒木金吾義剛の二人來住し其大蛇を退治せんとて大きな籠の様な箱の中に入り山中に到りて、大蛇の現るを待つ。夜半大蛇現れ二人の入る箱を十重二十重にまきしめつけんとす。兩人即ち中より一刀のもとに切りすて以て退治せりと云ふ。

八岩石傳説

○赤松

大字岩内鈴木家の下に赤岩とて大きな岩が日高川に突出している。古傳に大水が出て激流が來るごとに、この岩が水をはねかへしていつも堤防の缺潰を防いだ。そして此の岩の下に一種の魔物が住んでゐて人や船が行くと直に呑んでしまふのが例であつたが、いつしか其れが無くなつて「すき」と云ふ魚になつたと云ふことである。現にこの岩の上に呑まれた多くの人の墓がある。

第六章 産業及經濟調査

1 野口村職業別人口

農業	商業	農兼工	農兼商	官公吏	其他	計
二四八	六	一〇	四	一	四	二七三

全戸数二七三の中二四八戸までは農業である。尚其の他のものも多少の田畑は耕作してゐる故に全村殆ど純農と云つてよい。この純農村こそ農村の特質を現さなければ農村の生命はどこへ行つて留められるか。吾々教育者はこの統計によつて教育的活動を根本的に改革しなければならぬ。眞の農民を養ふべく農村教育の根本を打ちたてなければならぬ。

2 土地

イ 面積

種目	面積
田	一七四・三
畑	五九・七
宅地	四・五七
山林	一七三・七
計	四一二・六

此の調査によると、我野口村は農（田）によって生きなければならないことが明に證明されてゐる。

山林も村の割合に面積は広いが、山が浅くて海岸に近く森林と云ふやうなことは望のない山である。

茲に於て田の利用が痛切に感ずる。二毛作よりも三毛作、四毛作と研究して行かねばならぬ。口土地所有の自村持・他村持の区分

	自村持	他村持
田	一〇二・〇〇	七二・二六
畑	五一・一〇	八・六〇
宅地	三・一〇	一・八〇
山林	一六六・一〇	七・六

我村の生命線は田にあることは前の統計によつて明となつたが、この生命線の半分近くも他村の人に所有されてゐると云ふことは甚だ残念である。この表を見て発憤せざる者はなからう。第二国民教育もこの点に重点をおかねばならぬ。

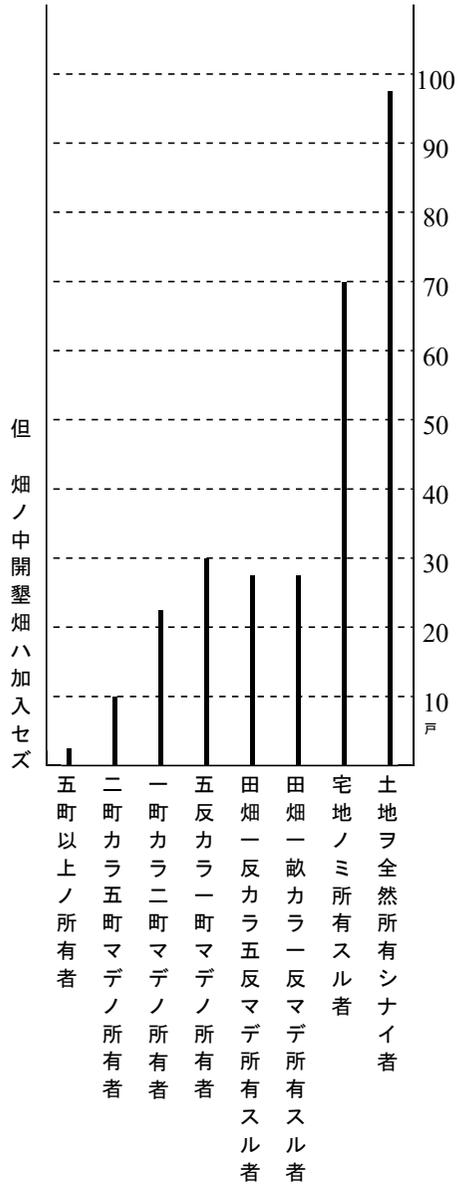
### 八自作・小作別

	自作	小作
田	七五・三町	九八・九町
畑	二八・三	三一・四

農家全戸数	二四八
自作戸数	四〇
小作戸数	八〇
自作兼小作戸数	一三二
耕地一戸平均	九反歩

自作地より小作地の方遙かに多いことはなにより残念である。なんとかして小作地を全農地の1/3位にしたいものである。五年計画で1/2にし十年計画で1/3位にしたいものである。

二土地所有者別調



この統計グラフによって、小作農の多い理も明に判る。土地の全然所有しない戸数の多いことに驚く。この戸数が五反から一町までの戸数となりかわって居れば稍理想に近い村となる。この田畑を全戸数に割当てると平均六反四畝歩で、畑地は二反二畝である。この平均までどうしても努力したい。

3 農業生産物 (三年間平均)

イ 穀類

項目	作付反別	收穫高	價格
米	一六二町五〇	四五二九石〇〇	一二七〇六六〇〇
麦	六九五〇	一三九〇〇〇	二一六〇〇〇〇
豆類	七五〇	一六〇〇〇	二〇一三〇〇〇
其他	二三〇		一五〇〇〇〇

ロ 蔬菜類

項目	作付反別	收穫高 (メ)	價格 (円)
西瓜	二町五一	二一五〇〇〇〇	三二二五〇〇
茄子	一三二	一〇五〇〇〇〇	九二〇〇〇
胡瓜	六二	五五〇〇〇〇	六〇〇〇〇

八果樹類

項目	作付反別	收穫高(尺)	價格(円)
大根	四町八九	六二四〇〇	四五〇〇
甘藷	三二二	一九二〇〇	一七二八
葉菜類	二三〇		一二〇〇
牛蒡			四五〇
里芋	一五〇		九〇〇
其他			二五三四

二特用作物

項目	作付反別	收穫高
夏橙	七町五〇	七六五〇
温州	三八〇	四九〇〇
柿	二五〇	二〇〇〇
其他	一〇〇	五〇〇〇

水畜産及養蚕

1 鶏

飼育数	一六一一羽
産卵数	一八七二貫
價格	二八〇八円

2 牛

飼育数	一七四頭
犢(年産)	三〇頭
賣上高	一五〇〇円

3 馬

4 蚕

- ・ 飼育枚数 六一一枚
- ・ 産繭高 八四二〇貫
- ・ 價格 二八三一四円

へ 農業生産高総額 二十一万六千二百四十九円

以上の統計を見る時蔬菜・園藝の方はまだまだ研究努力の余地ありと見なければならぬ。畜産方面の貧弱なることは云はずもがな。養鶏などはこんなことでは問題にならぬ。今の所では一戸平均十羽位である。これでは子供の遊びのまゝごとの様なものである。せめて一戸平均五〇羽位飼はねば養鶏と云ふ名はつけられない。

4 林業生産物

林業生産物高 一万〇六四〇円

項目	産額	價格
薪	一〇〇〇〇斤	六五〇〇円
木材	五〇石	一五〇〇円
松茸	五〇〇〇〇斤	四〇〇〇円
筍	九〇〇〇斤	九〇〇円

5 工業生産物

イ 瓦 業

瓦産額 二七〇〇円

ロ 其他 (木工)

産額 二一〇〇円

ハ 工業生産物高 四八〇〇円 (?)

ニ 総生産價格 二三一六八九円

6 農業生産費

イ 種苗代

一五二一六円

・ 稲の種代

林業は望みないから、山地を開墾するのが最も経済的である。開墾の余裕はまだまだ沢山ある。

播種量 三二・五石 種代 六五〇円

・麦の種代

播種量 二〇・七石 種代 二六五円六〇箋

・蔬菜類

種代 一〇六円

・果樹類種苗代 五〇〇円

種苗の中で蔬菜の種子は共同で播種園を經營して自村で採取することが必要である。

口肥料代 合計 三五四六五円

内 訳 稲 二四三七五円

麦 四八六五円

豆類 二二五円

西瓜 五〇〇円

茄子 三〇〇円

胡瓜 一〇〇円

大根 六〇〇円

甘藷 二〇〇円

其他蔬菜類 五〇〇円

果樹 三八〇〇円

計 三五四六五円

一戸平均 一三二円

反当二円の肥料代とすると全村額 四六六〇円

反当二円の肥料代とすると一戸平均 一八円

ハ農具消耗費 二九四〇円

ニ薬剤費 一二四五円

ホ労働費 九九六〇〇円

ヘ其他 四九八円

肥料代は平均一戸約一三二円も使つてゐるが、こんなことではどんなに汗を流して働いても、百姓は頭上はない。金肥は二円以下にして、一戸平均一八円位にしなければ勤定の合ふ百姓は出来

ない。これには自給肥料研究が必要である。農業薬剤は共同で購入して、共同駆除豫防が必要である。

7 其の他産業の生産費 一〇二〇四円  
 8 総生産費代 一五一〇二三円  
 9 産業上利益

イ 生産額から生産費減じたる産業利益金 八〇六六六円  
 ロ 他村へ支払ふべき小作料 三〇九九七円五〇銭  
 ハ 全村に於ける産業純益金 四九六六八円五〇銭 一戸平均 一九四円七〇銭  
 ニ 生産業以外の職業よりの収入

a 商 業 六戸 二四〇〇円

b 蔬菜小賣商（農閑利用）  
 ・ 人数 五九人 ・ 一日平均利益 一円七五錢  
 ・ 年間利益 五三八三円七五錢

c 農閑期土工  
 ・ 人数 一日平均 五四人  
 ・ 一年労働日数 一人二付 六〇日  
 ・ 賃 金 一日平均 一人二付 八五錢  
 ・ 全 員 一日平均 四五円九〇銭  
 ・ 一年平均 二九〇四円

d 運 搬 業  
 ・ 人数 五人  
 ・ 労働日数 一年平均 一人二付 二四〇円（？）  
 ・ 一日平均運賃 一人二付 二円  
 ・ 全員一年間 二四〇〇円

e サラリーマン  
 ・ 教 員 七人 五一〇円  
 ・ 銀行員其他 一人 四〇〇円  
 ・ 仲 介 業 五人 四五〇〇円

・他出子弟送金 一二五人 四七五〇円

f 生産業以外の職業にて他村よりの収入 三一四四七円七五箋

g 動産よりの収入 二八一〇〇円

h 全村生活費一覽表

計	三〇六二	一五三一〇	四一九七一	一〇八九五	五九〇七五	一三一八二〇
其他	一四〇	七〇〇	一九六七	五〇	二五〇〇	六八〇一〇
娛樂費	一六	八〇	二二四八	六〇	三〇〇	八〇一〇〇
信仰費	一六	八〇	二二四八	六〇	三〇〇	八〇一〇〇
旅行費	三〇	五〇	四二一五	〇	五〇〇	一三三五〇
教育費	〇	〇	一四〇五	三六五	一八二五	五一二八二五
普通交際費	六〇	〇	八四三	二一九	一〇九五	二九二四二五
医薬代	八〇	〇	一一二四	三〇〇	一五〇〇	四〇〇五〇〇
煙草代	九〇	四〇	一二六五	三二八	一六四三	四六一六八三
日用品代	一五〇	七五〇	二一〇七	五四七五	二七三七五	七六〇二三七
酒費	〇	〇	一四〇五	三六五	一八二五	五一二八二五
住宅費	三八〇	一九〇〇	五三三九	一四〇〇	七〇〇〇	一八六九〇〇
被服費	四〇〇	二〇〇〇	五六二〇	一四八五	九四二五	二〇五一三〇〇
食費	一五〇〇	七五〇〇	二〇〇二五	五四七五	二七三七五	五三四六六七五
一人一日平均(箋)	一五〇	七五〇	二〇〇二五	五四七五	二七三七五	五三四六六七五
一家一日平均(箋)	一五三	七〇〇	四一九七一	一〇八九五	五九〇七五	一三一八二〇
全村一日平均(円)	一五三	七〇〇	四一九七一	一〇八九五	五九〇七五	一三一八二〇
一人一年平均(円)	一五三	七〇〇	四一九七一	一〇八九五	五九〇七五	一三一八二〇
一家一年平均(円)	一五三	七〇〇	四一九七一	一〇八九五	五九〇七五	一三一八二〇
全村一年平均(円)	一五三	七〇〇	四一九七一	一〇八九五	五九〇七五	一三一八二〇

生活費を出来る文緊縮した家庭を標準としてあげたものであるから、事實は之以上の額に上がつてゐるだらうと思ふ

i 税金調

国税	三七八九	四〇	一二六三	二五二六	八
県税	七四六五	八一	七六八	五六九七	二〇
村税	七六四四	九八	一〇一〇	六六三四	二三
計	一八九〇〇	一九	四〇四一	一四八五八	五二
当村役場取扱税金(円)	四〇	九八	一〇一〇	六六三四	二三
他村民納税額(円)	一二六三	八一	七六八	五六九七	二〇
自村民納税額(円)	二五二六	九八	一〇一〇	六六三四	二三
一戸平均(円)	八	九七	二〇	二八	六一

j 全村収入計算概要

① 収入

・ 生産額総計	二三一六八九円
・ 生産以外の収入	五九五四七円七五箋
・ 総収入	二九一二三六円七五箋

② 支出

・ 生産費総額	一五一〇二三円
・ 他村へ納める小作料	三〇九九七円五〇銭
・ 生活費総額	一三一八二〇円二〇銭
・ 納税金総額	一四八五八円二七銭
・ 支出総額	三二八六九八円九七銭

k 収支差引不足

三七四六二円二二銭

l 村全体の年々負債増加額

三七四六二円二二銭

一 戸平均の負債増加額

一三三三円三二銭

経済調査中生産の方面は、事実に近いまで調査せるも、消費方面は調査困難にして、中以下の生活をしてゐる一家を標準として調査せるものなるを以て事実と符合しにくいかも知れぬ。しかし余り大差なしと信じてゐる。不況襲来の折から収支相償つた生活をすること刻下の急務である。それには生産の合理化、労働力の増加を図ると共に、消費経済の節約を図らねばならぬ。しかもこれは全村一致して行ふ事肝要である。

10 産業振興上の諸機関

イ 生産物の販賣先

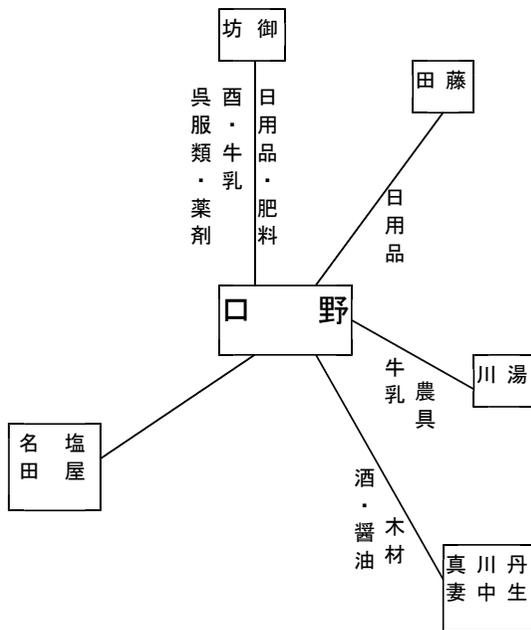
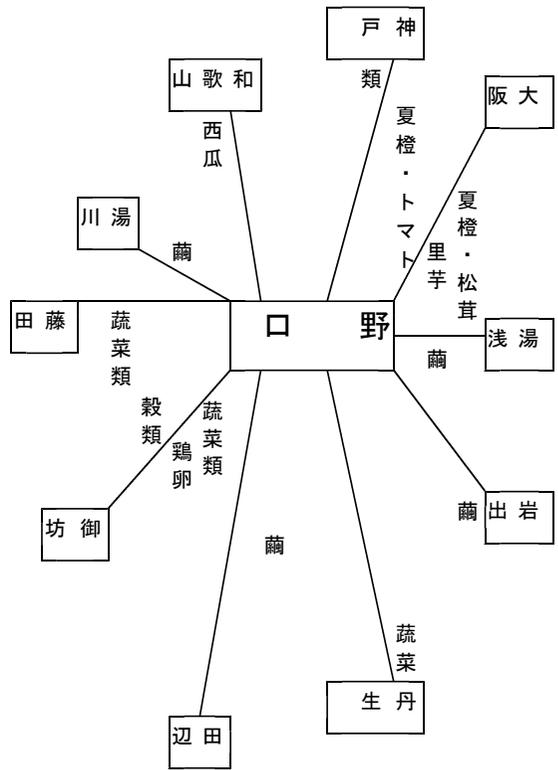
ロ 消費物購賣

# 第七章 民俗

## 1 俚 謡

### イ熊野神社神樂歌

- ・ はつ王子の峯の細道ほそくとも、おゝつれだに行かば車路とせう。
- ・ はつ王子の峯の道こそおはしませ、おゝおはしませ。春吹上のほでの寒さに。
- ・ 東山かうらうの峯に、おぼろ出でおゝおほう出で、峰なる花を折くざすとよ。
- ・ 奥山や大峯枚にそなれ出で、おゝそなれ出で、



朝日さす夕日輝く熊野山、オヽ熊野山、いづれもだけに雲やかゝらむ。  
筑紫船上がるときはべにつけてオオベにつけてはぐるめされて出でてすき屋を。  
日の御子は日の山からでおはします。オオおはします。帯紐といひ今ぞまします。  
きうたちは揃ゆるをりは深山なるオオ深山なる大くろ小くろもおしからず。  
この御前のましますさきは地もゆるぐおゝ地もゆるぐ木くさのなびくちやうの早さよ。  
この御前のけふの御幸に逢はうとて、オヽ逢ほうとて、いさなる神も今ぞまします。

口石 突 歌

ここの屋敷は前から繁昌、今は若世で尚繁昌  
ここの屋敷の乾のすまに鶴と亀とか舞をまふ

八盆 踊 歌

揃た揃たよ踊子が揃た、東の角から西へ舞へ  
踊子等麦飯みたよにばらつくな、お月様の様に丸くなれ

二手 鞠 歌

とんく お寺の道成寺、釣鐘おろいて身をかくし安珍清姫蛇に化けて、七重にばけて一廻り  
ほうねんじやうの尻まくり、落したらまくらるる。落とさぬやうにしっかりなされて受けなされ。

へ子 守 歌

舟子呼んだの清姫さんか、なぜにこの橋渡られぬ。  
朝の疾うから庄屋さんどこへ、免状たばに吉原へ。  
三尾のうるめに若野の卵野口牛蒡に和田大根。  
小石川さん池田の角力で、お目のまふ程投げられた。  
鳶山から熊野谷見れば、はだか馬かよ倉がない。  
野口の庄屋某かつて、鳶山にのぼり熊野谷を下敢して此の一首を戯作す。  
熊野は古来苛税になく貧村たり。これを傳へ多くもの切齒危腕、皆臥薪嘗胆を誓ふ。明治に至り

(地租改正と共に賦課公正となり、村民殆ど蘇生の恩あり。爾後産をなすもの相踵ぎ、熊野の谷白亜の倉建並ぶに至る。)

お前どこから私紀州日高、日高どこなら岩内じゃ。  
天田・岩内・神森・野口・金屋越へたら和佐・江川。  
私歌好き歌はにやならぬ、歌でこの身がはつるとも。  
今宵雲りて明日雨降れば、天の川をば渡らりか。

・私等山行き破れた着物、行きと戻りに木にかゝる。  
 ・時は時節であきらめなさい、やかた舟さへ大根つむ。  
 ・私家のこのこはもうねるさかに、誰もやかまし云はんすな。  
 ・誰もやかまし云へんけれど、私家のお爺さん枕の音。  
 ・歌は歌がち道通りがち、今度お寺へ詣りがち。  
 ・一人山道淋してならぬ、声をかけくれほととぎす。  
 ・声はすれども姿は見えぬ、あなた深山ほととぎす。  
 ・斯して斯うすりや斯うなることゝ知りつゝこうなつた。  
 ・往んでねよかよ蕎麦屋へよろか、何も勘定で往んでねよ。  
 ・こけこ鶏死ぬまで歌ふ、死んでから鳴く法螺の貝。  
 ・お前お下り私は上り、姿見かはす汽車と汽車。  
 ・蒸気出て行く煙は残る、残る煙は癪の種。  
 ・將棋出て行く桂馬は残る、残る桂馬は角の種。  
 ・朝もはよから起きようお前、親と金とは使うまいら。  
 ・歌に歌ても囃のなはいは、寺の坊主のなはい如く。  
 ・寺に坊さんはおろかなれども、井戸に釣瓶のなはい如く。  
 ・泣いてくれるか出舟の時に、鳥なくさへ気にかゝる。  
 ・鳥泣くのを気にかげよすな、ここは森の下いつもなく。  
 ・博奕打ちやせず大酒のまず、なんで身上がしもたやら。  
 ・死ぬる病は唐天竺の耆婆の薬も叶やせぬ。  
 ・麦の飯をば角立て食へば牛とも見えず馬さうでなし。  
 ・こんな泣く子を私ゆするの飯の種じやと思やこそ。

ト麦 打歌

・私とお前と強力つれて、せめて廿日の旅したい。

2 童 戯

複雑となるを以て、童戯の種類のみを上げ方法等の説明は省略す。

イ男子の遊戯

・首切り  
 ・雪足  
 ・竹馬

七、八尺位の青竹二本の節を揃へて、下より一節目又は二節目辺に、木片を左右よりはさんで確とむすびこの上に乗って歩む。高い程自慢で高さ擔まで届くものもあり。冬の遊戯なり。

・おせおせまゝこ 冬季寒さしのぎに行ふ。

・蜘蛛の喧嘩 女郎蜘蛛をとり細き棒の先にてまきあひをさせる。

・鉄砲 紙にしこんだ火薬によりピストル形鉄砲をならす。

・石鉄砲 竹の節をはさみて大穴と小穴を前後にあけ、割竹をまげて之にはさむ。割竹の前部をひいて放てば石・豆は弾いて飛ぶ

・水鉄砲 紙鉄砲  
・枚鉄砲 枚の實を飛ばす

・石遣り 二、三尺の竹の先端より二つに割り第一の節にて止め其れに帳をはさんでわづかに開きおき之に手頃の石を挟みて一直線になる時は石は高く遠く飛ぶ。

・紙鳶 之をとばすを上すといふ。種類は武者及英雄の半身を描ける普通の小紙鳶に奴紙鳶とす。一月より三月にかけての遊びなり

・蜻蛉かえし やんまの雌をつないで竿の先に結び一定の長さだけ自由に飛ばす。雄の来るを誘ひ捕る「おしべやんま・こうしべやんま雌奴に負けてにぐるやないかいな」と呼び乍ら追ひかける。夏の夕方

・輪廻し 竹の輪、桶のたがのぬけたもの、針金の輪等を竹の棒Y形にしたるものにしてまわし遊ぶ。

・券 直径一、二寸の円形馬糞紙の表に武將又は古英雄の肖像画をはりつけたるもの一をもつて他をうち、叩きかへせば勝とす。一名かやしといふ。

・蜻蛉 長さ二、三寸、幅三、四分のうすき竹片の両翼をそぎ、中央に細き棒を貫きて丁字型とし、それを両掌にすりまわし乍ら勢よく飛ばす。形とんぼの如し。

・じゃんけんとび 二人一組となる、一人はとび一人はじゃんけんをなす。石にて勝てば幾足、鉄にて勝てば幾足

・石けり ときめおきとび手は一定の数だけとび一定の距離を早く来れば勝となる。

・ぶんぶん 石けりの如き場所をとり枡の中に石或は瓦のかけを一箇ごとにけつてゆく



長さ二・三寸幅四・五分ばかりの竹片の中央に穴をあけ、これに糸を通し両手にかけて廻しつゝ、

糸に緩をかく。かくてよき程によりのかゝりし時、両手を左右に引き或はゆるむれば、竹片は音を発してまわる

・手裏劍

薄の葉を成るべく中筋の堅きをとり、手前一寸位の処に豫め筋と直角にさしをき先方は其の両端より中筋に並行してさき脚とし、之を左手に把持して右手の人差指にて弾くやうに切れば飛ぶこと矢の如し

・はず玉

みづづを多く糸に結ぶ。之を餌としうなぎ・蝦・かにをつる。

・鰯飛

磧、池堤などに於ける遊戯也。扁平なる手頃の石を拾ひ、水面に平行して投ぐれば水面をすれすれに処々水を撥きつゝ前方へとび去る。一階…二階…三階と唱ふ

・京見たか

一人の両耳の辺を両手でかさへ上げて、「京見たか、大阪見たか」と云ふ

・ばん

四角な紙を三角に二つ折し各の耳を中央へつぶしたゝみ、其端の一方を持ちて力任せに拂へば両耳同時に開き「ばん」と大なる音す

口女子の遊戯

・なゝこ

小布片にて一寸乃至二寸四角の袋を作り小石を入れる。通例七つなるが故にこの名あり。「お一、お二、お三」と歌に合せて一袋を高く投げ上げ、落来らぬ間に残る六つ散乱せる袋を或は集め或いは捌き、手早く落来る袋を受くる。其間唇、鼻、眼等種々の仕草をなす

・はじき

小さき石を適当な数を出し合ひ、板の間などへまき、適当に近接せる二つの石の間に假線を引き、何れか目的の石を爪にはじき、打合せ取もて行く遊戯

・手まりつき

大阪、大阪でどん、やすやでどん、やすやまかせのおはぐるはい、幾らです、五百です、もう一寸まからんかすからんかほい、あなたのことならまけとくに、あい、あふ、あみ、あよ、あむ、あな、あや、あこ、あと、天王寺のお猿さん、赤いおベベが大そうすきで、てちやん・てちやん、こんばん、およめをもろてございのすいもん、ご鯛のはまやき一ぺんおすゝりませうか、二はいおすゝりませうか、三ばいめにおさかをたて、てちやん・てちやんはてない、はてないはてはて、はてない拾度一回すみしました。一の一の一まわり

・草笛

麦の黒穂の嫩茎、たんほゝの花軸にて笛を作り、口にくわへてシイビビ…と吹く



・ 中の中の坊さん

数名手をつなぎ合ひ円を作る。一名は眼をとじて円の中央に坐す。皆これを廻って「中の中の坊坊さん、何故丈が低い。親の日に海老食て其れで丈が低い、立って見よ後に誰がある」と云い終りて立留る。中央の者之に対へて云い、中てられし者代つて中央に立つ、中らなければ同じことをくりかへす

・ すべすべ

日高川の堤防など適当な傾斜のところ、高い処から低い所へすべって行く

・ たんぽゝ

たんぽゝの冠毛あるものを持ち「酒買うてこい、酔買ふて来い」と云つて息を吹きかけて飛ばす

・ 笹舟

笹の葉などにて小舟を作り、小川に浮べて楽しむ

### 3 郷土行事

○正月 元旦（以下主として旧暦による）

・ 初水 男子が早朝起きて、其日使用の水をくむ

・ 年始まわり 各交際の家へ礼に廻る

・ 家内履物を新にす。食器も新しくする所あり

・ 雑煮を朝たきたるのみにて、其日物を煮ず

・ 子供等は家々へ「お目出度う」を云いて廻り、串柿と蜜柑を貰ふ

・ 朝掃除せず。福をはき出すと称して

・ シメナハを張る。これにはウラジロ・モッコク・ユズリハ・橙をつける

・ 由良開山又は和佐の開山へ参詣す。福を受くといふ

・ 床の間には鏡餅をかざり、みかん・柿等を供ふ

・ 門松は神社、佛閣には立てるも一般には少し

・ 子供の遊び かるた・たこあげ・すごろく・羽子つき

○二日

・ 書初め 天下太平・松竹梅等書きて、神棚に供へおき一四日のどんどにてこれをやく。其の日高く上る時は上達すと云ふ

・ 打初め 白紙に弊を切り田に立ち二鍬、三鍬打つ

○三日

・ オシメサゲと称して「シメナワ」を下して、之に飯を供ふ。神棚のもののみ残し置く

・ 三ヶ日も今日で終なれば、各自仕事の計画を立て

○七日（七日正月）

・朝葉の葉・なづな等を入れ雑炊を炊き、家内之に祝ふ。なづなは昔から二子やしきにては採るなど云ふ

○十四日

・どんど  
各自の家の「シメナハ」門松等を川の岸、道の辻等に持ち集り之を焼く。二日の書初めもこの時に長き竹の棒にはさみて火にやく。又神棚に供へたる餅も焼きて、家内分かちて食ふ

○十五日（中正月）

・中正月と称す。朝各戸あづきかいをたきて家内祝ふ。又神棚にも餅の切りたるものと共に供ふ  
・又「ナレナレ」と称して柿、枇杷、桃、李等の木を少しなたにて切り「なれなれ柿の木ならねばぶち切つて釜の下の火いけにしよう」と称しその木の葉にかゆを供ふ

○二月一日（二正月）

・二月一日を二正月と称し業を休み餅をつきて食す

○節分

・節分夜にはヒヒラギの葉を家の戸口にさす。又出入口に鰯の頭を棒にさしておく

・豆まき

先づ川に至りて小さき美しき石を閏年は十三、平年には十二拾ひ来る。之を豆と共に柀に入れおく。四方の戸をしめ切り主人はこの柀を持って表の戸を少しばかり開け、其の石を外にほり出し「鬼は外」と称し、今度は豆を屋敷にまきて「福は内」と称す。かくすること三回にして終る

・昔は裸参りと称し、此晚裸体にシメを張りて神佛に参拜せり

○初午

・二月初めての午の日に稲荷社の祭を行ひ、各所に餅まきあり

○卯月八日

・釈尊降誕の日なれば、家ごとに團子を作りうつき・つゝじ等の花を高く棒の先に結び門先に立つ。各寺院には御堂に裸の釈尊体を祭り甘茶を作る。子供等はお寺へ甘茶をもらいに行き、それにて字を書く  
（卯月八日は四月八日なり、二月には十五日釈尊涅槃会を各寺院にて行ふなり）

○三月三日

・節句と称す。親類近所にて男子の生みたる家へは男人形、例へば天神さん・清正虎・ちんちん馬等を贈り、女子の生まれたる家へは内裏さん・きぬびなはん・箆を贈る。贈られたる家にては色附の餅をつきて、その家に配る。之を節句初と言ふ

・この日はどの家にも人形をかざり、草餅をそなへ、桃の花、白酒、菱餅を供ふ。又ひな菓子と称し、人魚の形をした菓子を桃の花などにつけて供ふ

・各戸まきずしを作りて、之を折につめ山山と称し見はらしのよい所に上りて之を食す

○三月二十一日前後 彼岸

・寺で餅まき、供養をなし、彼岸参りと称して参詣す。おはぎ、七とこ参り

○ 四月二十七・八日

・道成寺会式。軽業・見せ物・餅まき・店などあり。村人多数参詣・行樂す

○ 四月二十日前後

・招魂祭

道成寺招魂碑の前にて、郡内戦没軍人の慰靈祭あり。余興として角力・投餅等あり

○ 五月五日

・男の節句と称す。男の子のある家には鯉のぼり・絵のぼりを立つ

・五月人形をかざる

・各戸では「かしは餅」を作る。今は「さるとりしばら」の葉にて包む。又あしの葉にて包みたる「ちまき」をも製す

・この日は又しようぶ節句と称して「しようぶ」とよもぎを屋根裏にさし又しようぶ風呂を焚く。又しようぶにて鉢巻すれば病にかからぬと称す

○ 毛付休

・夏至前後に於いて一字田の植付の終りたる時「毛付休み」と称し「かしは餅」を作りて食し業を休む。此頃楊梅の実赤らむを以て子供等之をとりにゆく。

○ 牛休み

・五月の丑の日を牛休みと称す。各業を休み小麦餅を作り、田毎に栗の小枝につけて供へ家にも食ふ。早朝より牛を川に入れて洗ひ、食物も平常よりよき物をあたう。蓋し平常の労を謝するなり

○ 夏祭り

・七月十七日夏祭りと称し業を休む

○ 十七夜

・七月十七日夜は道成寺の十七夜と称し、各人納涼がてらに参詣す

○ 夏越し

・七月三十日を「夏越し」と称し、住吉神社の祭なり。由良住吉神社に参詣す

○ 七月七日

・七日盆と称す。この日は「地獄の釜のふた開く日なり」と云ふ。各戸にては佛具を磨き盆を迎へる準備をなす。昔は「たなばた」の行事ありしも今日此の辺にはなし

○ 盆 會

・十三日は佛の来る日とて、子供等は小さき提灯に火をつけ、川の岸或は寺の墓場に至り「提灯で迎へませう、おそけりやお駕カゴでむかへましょう」と呼び佛を迎へに行く。家に軒提灯をとぼす。家には鉦の声聞こえて、佛の来るが如き感事す

○ 七月十四日・十五日

・盆會にて各戸には佛をまつり、なすび・西瓜・かき等を蓮の葉に盛りて供ふ。夕方より家内揃って墓に参り、お花・線香等を供ふ。十六日朝之等を日高川に流す、之を佛を送ると云ふ。又水棚と称して軒の下に、竹にてあみたる棚を作り之に前記のものを供ふ

○八朔

・八月一日を八朔と称し、各家業を休み餅をつく。これを「にが餅」といふ。この頃より昼休みはやめられ夜業をせねばならぬ。即ち其の餅を食へば昼休みは無くなり、夜業しなければならなくなるので「にが餅」と称するなりと

○野分休み

・二百十日も無事にすめば、その前後に野分休みと称して業を休む

○九月十三日(新)

・乃木祭。乃木大将のありし日を回顧す

○十月十七日 神嘗祭・氏神祭礼

・十六日は宵宮と称し、神社に夕方より参拝す。十七日は本祭にて祭式あり。渡御・競馬・四ツ太鼓・屋台・山車・獅子舞等の催物あり、人出多し。この日家々には「甘酒」「なれずし」を作り、神々へ供へ自分等も食ふ

○亥の子

・十一月中の亥の日に、亥の子と称して神を祭る。即ち赤飯をたきて之にて握飯を作る。平時の年は十二個、閏年は十三個枀に盛りて供ふ。この他みかん・柿等をも神々に供ふ。昔は子供等はつとにて、きねを作り家々につき廻りてみかん・柿等を貰ひしと云へども、いまはそのことなし

○こきあげ

・農家にては今年の稲を取り入れて、全部もみ取りたる時には「こき上げ」と称して、農具に飯を供へ、自分等も御馳走す

○明治節 十一月三日

・体育デー・山登り・運動会

○報因講

・十一月中真宗の家にては、報恩講と称し開祖親鸞上人の祭りを行ふ。各家には餅をつき、僧侶を招きて佛事を営み、親類縁者も参拝す

○誓文払ひ

・大賣出し・年の市

○十二月三十一日

・大晦日と称し其年の最後の日なれば、各戸家を掃除し迎春の準備をなす。又神社に参拝し、旧年の加護を謝す。この晩おそくまで起きて「にしめ」を製す

4 郷土方言訛語

## アの部

あいた	(明日)
あいつ	(彼)
あいまち	(誤)
あが	(我)
あがえゝ	(我家)
あかべ	(人に反抗の態度)
あきんど	(商人)
あさげ	(朝食前の仕事)
あさつばら	(朝早くから)
あた	(頭)
あっぱ	(馬鹿)
あてすっぱ	(当推量)
あなっこ	(穴)
あがり	(上り口)
あばえた	(あまえる子)
あばすく	(用意足りない)
あほくさい	(馬鹿らしい)
あほつたれ	(馬鹿目が)
あやか	(似る)
あらくたい	(あらっぱい)
あんじょう	(味よく)
あんか	(こたつ)
あるき	(村の令達ふれあるく使丁)
あらだよ	(あるのに)
あんら	(彼等)
い	(え)
いかき	(策)
いかなこと	(大層なこと)
いきづむ	(息詰む)

## ウの部

いきなり	(直ぐな)
いきのせに	(引続き)
いげ	(湯気)
いける	(生きる)
いごく	(動く)
いこす	(火を起こす)
いぢくる	(弄ぶ)
いしごら	(石の多いこと)
いそしい	(甲斐甲斐しい)
いたいた	(子供の痛い所)
いとほん	(娘)
いびつ	(正しからざる形)
いやしんぼ	(卑しい人)
いらつ	(急ぐ)
いらう	(弄ぶ)
いりじゃこ	(小魚のほしたもの)
いれもん	(入れ物)
いろせもない	(碌でもない物)
いん	(はい)
いんめう	(忌事)
いろせと	(色々)
う	(鰻)
うかうか	(心落ちつかざる様)
うざうざ云ふな	(戯談云ふな)
うざつく	(右同)
うそぎたない	(薄汚い)
うちべんけい	(自分の家でえらい子)
うづく	(痛む)
うつごる	(うつむく)
うとい	(愚)

## 工の部

うまうまと  
うら  
うんこ

(巧に)  
(及公)  
(糞)

## オの部

えさ  
えづく  
えづい  
えつり  
えしむ  
えいえ  
えらう  
おあし  
おいしい  
おいぞ  
おいるしな  
おかず  
おかん  
おしきなこと  
おこる  
おこらい  
おこし  
おしきせ  
おじくそたけ  
おたぐら  
おっさん  
おっばい  
おとこし  
おと  
おとゝ  
おなら  
おばさ  
おひき

(餌)  
(嘔吐を催す)  
(狡猾)  
(壁の中の竹)  
(羨む)  
(否)  
(大層)  
(銭)  
(うまい)  
(お尻)  
(御免な)  
(副食物)  
(母)  
(沢山)  
(叱る)  
(お許し下さい)  
(腰巻)  
(晩酌)  
(臆病者)  
(あぐら)  
(和尚)  
(沢山)  
(下男)  
(父)  
(弟)  
(屁)  
(一生嫁せざる女)

(贈物を受けた時中に入れる物)

## カの部

おぶとぞうり  
おまん  
おもし  
おめれた  
おきなこと  
おろかた  
おんしゃ  
おんた

(大人のはく草履)  
(饅頭)  
(重石)  
(目出度いこと)  
(沢山)  
(大方)  
(汝)  
(雄)

がいな  
がいたらくな  
がいな  
があたり  
かいね  
がきすつぽ  
かさやぶち  
かしん  
かだ  
かたつぽ  
かなご  
かなはずなとこ  
から  
からつぽ  
かはせ  
かんわるい  
かんぎ  
かんち  
かんでき  
かんのっさん  
かんより  
かんご  
かんぞう

(荒っぽい)  
(右同)  
(大層な)  
(河童)  
(家のまわり)  
(子供をあざける時)  
(祭の明くる日)  
(菓子)  
(臭気)  
(片一方)  
(稲板)  
(危機)  
(体躯)  
(空虚)  
(風雨の方向かわる)  
(考えわるい)  
(鍵)  
(片目)  
(こんろ)  
(神主)  
(紙捻)  
(籠)  
(根の残ったもの)

### キの部

がんばんこ

(棺)

きあがり  
きあがりもの

(調子にのること)  
(氣上り者)

きしな

(来る途中)

きせろ

(煙管)

きたなか

(半反)

きっそうよう

(幸先よい)

ぎっちょ

(左き)

ぎっしり

(一ぱい)

きなこ

(豆の粉)

きんのう

(昨日)

きのみ

(椿の実)

きばる

(辛抱する)

ぎうちゝ

(牛乳)

きよねん

(去年)

きよろたき

(軽率な者)

きれこむ

(財産を少くする)

きんご

(細泥)

きりもん

(着物)

### クの部

くさす

(悪しざまに云ふ)

くき

(つけな)

くじう

(片荷)

くそばい

(くすぐったい)

くそどん

(愚鈍)

くだまく

(管巻く)

くちなは

(管蛇)

ぐつ

(都合)

ぐづる

(難題を持ちかける)

くになう

(賣買貸借用旋業者)

ぐにやぐにや

(柔軟なるさま)

### ケの部

くびまき  
くゆる

(襟巻)  
(崩れる)

げすつと

(共謀すること)

けたい

(決勝)

けっこじん

(最下位)

けつね

(怪体)

けなぐさい

(お人好し)

けなりがる

(きなぐさい)

けむたい

(羨しい)

けろり

(煙い)

げんくそわるい

(意外のさま)

けんけ

(げんが悪い)

けんぺん

(狐)

こいさ

(ベ)

こいされませ

(今夜)

こいどん

(御免下さいませ)

ごうさいわく

(下女)

ごうしんさん

(立腹應心する)

ごうたれ

(神棚)

ごいな

(遊蕩)

ごくど

(この様な)

こゝたい

(放蕩者)

ごし

(こゝらあたり)

ごし

(一しように、共に)

こげら

(料見)

こたゆる

(焦)

ごっつい

(疲労する)

ごっかり

(丈夫な)

こって

(一度に多く)

こつて

(牡牛)

ごてつく

こな

こなす

ごぶん

こべ

ごむてん

ごりごり云ふ

こはい

こんこ

こんこん

こんじ

こんだ

こんにゃ

ごんぱち

さいしぶね

さいめ

さか

さくい

さしげた

さぶしい

さらい

さらくよい

さんじゃく

しあさって

しこる

じっちり

しな

しなう

しならづよい

じばくる

じばん

(紛擾する)

(大根等の間引菜)

(眨す)

(白墨)

(額)

(ごむまり)

(大いにこりる)

(堅い)

(沢庵)

(狐)

(乞食)

(今度)

(舌)

(虎杖)

(渡舟)

(境介)

(故に)

(もろい)

(足駄)

(淋しい)

(新しい)

(手取早い)

(兵児帯)

(明後々日)

(叫ぶ)

(実意に)

(途)

(萎)

(弱き様なれど強い)

(滑稽なことをする)

(襦袢)

しぶちん

しゃがむ

しゃかん

しゃくぼる

しゃつぽ

しゃもないこと

しゃろ

しゃんしゃん

しゃんしゃん三つ

しゃうてんに

じゃうじ

しよつこい

しよのつけ

しりふりおます

しろきん

しんどい

じんべい

しわくちや

すくど

すこたんくう

ずいき

すこ

すこい

すごく

すすこなり

すおけ

すつちよない

すつこり

すこつと

すてんこ

すねきり

(吝粟?)

(屈む)

(左官)

(硬直)

(帽子)

(仕様もないこと)

(煙草入)

(湯のわいてゐること)

(合つ)

(先刻)

(常に)

(しめっぽい)

(最初)

(せきれい)

(銀貨)

(だるい)

(袖なし着物)

(しはだらけ)

(枯葉)

(当てがはづれる)

(里芋の茎)

(頭)

(悪賢い)

(抜く)

(漬物)

(素気ない)

(全部)

(裕一枚)

(山の頂)

(バッチの短きもの)

(床下)

### スの部

### シの部

### サの部

すばくらのもの

ずぶぬれ

すまっこ

する火

### セの部

せきだ

せきたん

せごし

せゝる

せたるう

せちがう

せなか

せぶる

せんせ

せんぞん

せんち

### ソの部

そい

ぞうにん

そがいな

ぞくしよな

そこたり

そつごする

そこたい

ぞれ

### タの部

だい

たいがい

たいした

だいいじない

だいだ

だかえる

たかる

(づるい)

(頭からぬれる)

(隅)

(マツチ)

(雪駄)

(石油)

(骨なりに魚をつくる)

(弄)

(負ふ)

(いぢめる)

(背)

(強いて請ふ)

(先生)

(先祖)

(便所)

(それ)

(雑煮)

(そんな)

(毒々しい)

(そこらあたり)

(釣合う)

(そこらあたり)

(癩病)

(誰)

(大層、大方)

(大なる)

(差支へない)

(誰か)

(抱く)

(止る)

たきもん

たくしあげる

たごる

たつる

たにつこ

たねる

たのいし

たばる

だび

たまから

だる

たんご

たんた

たんた

だんなし

たんび

### チの部

ちぎ

ちぎに

ちくしょうげな

ぢちめ

ちっこ

ちっこけな

ちつち

ぢどさん

ぢびくさ

ぢべた

ちぼ

ちやあ

ちやかしはい

ちやつと

ちやんぶくろ

ちよいちよい

(薪)

(まき上げる)

(咳をする)

(閉める)

(谷の底)

(尋ねる)

(田にし)

(神佛の供物を下げる)

(樋の出口)

(初めから)

(下肥)

(肥桶)

(風呂)

(沢山)

(金持の家)

(度ごと)

(秤)

(直に)

(小さな)

(まじめ)

(小さな人)

(小さな)

(虫)

(地藏尊)

(少しばかり)

(地面)

(すり)

(茶)

(やかましいわい)

(急に)

(茶袋)

(歩き出す)

ツの部

ちよつこと  
ちよらかす  
ちよろい  
ちよろまかす  
ちよんちよ  
ちらかす  
ぢりぢり  
ちん  
ちんちろ

(少しばかり)  
(あやす)  
(弱い)  
(ごまかす)  
(苗)  
(散)  
(漸く)  
(坐ること)  
(こぼろぎ)  
(柿の熟したるもの)  
(蹲踞)  
(か)  
(槌)  
(苦しい)  
(普段着)  
(缺損)  
(放蕩者)  
(つばめ)  
(芽ぐむ)  
(肥満の人)

テの部

てがう  
てき  
てきはき  
できもん  
てこづる  
でこぼこ  
てばしこう  
てしょう  
てたふ  
てつきり  
てゝ

(なぶる)  
(対称)  
(敏捷)  
(腫物)  
(持ちあぐむ)  
(凸凹)  
(大層)  
(小皿)  
(手傳ふ)  
(必常の)  
(手)

トの部

てばしこい  
てのこい  
てぼちん  
てまいり  
てえろ  
てんきり  
てんご  
てんて  
てんでこまひ  
てんないかう  
てんであわぬ

(きびしい)  
(手拭)  
(出額)  
(てまり)  
(大層)  
(最上)  
(たはむる)  
(手抜)  
(多忙の時)  
(賄賂つかふ)  
(間に合はぬ)

とい  
とが  
どきつい  
どきどき  
どくしょう  
どたま  
どつく  
どつきり  
どつきり  
どつきり  
とつき  
とゝ  
とぶくろ  
どもなら  
とらげばゞ  
とりつく  
どろべ  
どろべた  
どんざ  
とんと  
どんばいこ  
とんび

(遠い)  
(罪)  
(きびしい)  
(はらはらする)  
(大層)  
(頭)  
(打つ)  
(役者の最上級者)  
(沢山)  
(よそゆき)  
(魚)  
(戸袋)  
(腕白)  
(産婆)  
(たゝる)  
(泥)  
(泥に汚るゝこと)  
(どてら)  
(ちつとも)  
(目高)  
(鳶)

ナ

ないない  
ないない  
ながいこと  
なかせ  
なかどる  
なきみそ  
なつとかしてくれ  
なめら  
なりわるい

ニ

にい  
にへくりかへる  
にぎらす  
にくそげな  
にぐる  
にたりよったり  
につちやくち  
にってんこぼし  
にやう  
にんに  
にんぎやか

ヌ

ぬくどり  
ぬけさく  
ぬすつと  
ぬらりくらり  
ぬつとこせ

ネ

ねき  
ねじくすむ  
ねじっこ  
ねづめ

(かくしておくこと)  
(ないしよ)

(長い間)

(仲仕)

(二人にて荷ふ)

(泣き易きもの)

(何とかして下さい)

(土気のない所)

(風悪い)

(兄)

(煮へかへる)

(贈賄)

(憎らしい)

(にげる)

(似通)

(物のねばる形)  
(太陽の直射日光の下に居る)

(うめうめ)

(握飯)

(販)

(ふところ手)

(馬鹿)

(盗人)

(はつきりしないもの)

(無知無能の者)

(縁)

(ひねくれる)

(筒袖)

(ねづみ)

ノ

ねぶち  
ねんしゃ  
ねんね  
ねじっこ  
ねつい  
ねぶる

のー

のこぎ

のさばる

のし

のしろ

のす

のゝこ

のぶとい

のぼ

のろ

のんだくれ

のんの

のつけ

のっぽ

のっば

はい

はがい

はきだめ

はきもん

はしくれ

はしりごく

はち

はっさい

はったい粉

ぱっぱ

はてきり

(値)  
(物を丁寧にする人)  
(寝)

(筒袖)

(執拗)

(眠)

(ね)

(野抜)

(そりかへる)

(主)

(苗代)

(上) 山をのす

(綿入れ)

(圖太い)

(圖抜けて大きい)

(馬鹿)

(酒のみ)

(幟) 小児

(冒頭)

(丈の別に高いもの)

(魚はえ)

(残念)

(ごみため)

(履物)

(端)

(競走)

(馬鹿)

(父母の軽率な者)

(麦の粉)

(煙草)

(際限)



### マの部

ぼつ ぼつり  
 ぼて ぼてれん  
 ほと ほところ  
 ぼろく ぼろくそ  
 ぼろくち ぼろくち  
 ぼんさん ぼんさん  
 ぼんぼん ぼんぼん  
 ぼっちゃん ぼっちゃん

(提かご)  
 (魚行商人)  
 (張れること)  
 (ふところ)  
 (悪 罵)  
 (よい金儲)  
 (金持の子供)  
 (腹・子供)  
 (金持の子の尊称)

### ミの部

まー 今  
 まいだれ (前掛)  
 まいがみ (丁稚)  
 まし (比較的よい)  
 まぜ (南風)  
 ませくれ (早熟)  
 まぜめし (五目めし)  
 またい (おとなし)  
 またぐら (股)  
 まちやう (眞面目)  
 まっと (もっと)  
 まぶい (まばゆい)  
 まめこ (豆)  
 まんまと (うまく)

(今) まー 一日  
 (前掛)  
 (丁稚)  
 (比較的よい)  
 (南風)  
 (早熟)  
 (五目めし)  
 (おとなし)  
 (股)  
 (眞面目)  
 (もっと)  
 (まばゆい)  
 (豆)  
 (うまく)

### ミの部

みしろ (箆)  
 みせもん (見せもの)  
 みぞこ (溝)  
 みっちゃん (痘痕)  
 みて (田の溝)  
 みなこと (水の落口)  
 みゝご (耳だれ)  
 みやげ (着物の縫い上げ)

(箆)  
 (見せもの)  
 (溝)  
 (痘痕)  
 (田の溝)  
 (水の落口)  
 (耳だれ)  
 (着物の縫い上げ)

### ムの部

みやうじ (虹)

むかつく (不快)  
 むきになつて (眞剣になつて)  
 むくすけ (全)

むごい (あれな)  
 むさい (汚い)  
 むせくる (むせる)

むしる (奪ふ)  
 むっしり (沢山)

むねくそわり (不快に感ず)  
 むなぐら (胸)

### メの部

めくさ (目の悪い人)  
 めっぼうかい (大層)

めけん (眉けん)  
 めご (芽)

めっそう (目分量)  
 めったむしょう (むやみに)

めんた (雌)  
 めんめ (銘々)

### モの部

もりどん (子守)  
 もえくさし (余燼)

もう (中)  
 もじく (頭のうしろ)

もちやそび (破かいする)  
 もゝたぶら (玩具)

もやい (股)  
 もんちやくれ (仲間)

### ヤの部

もり子 (子守)  
 もんちやくれ (紛擾)

- 85 -

# 第八章 我が村に於ける衛生保健状態

## 1 要 項

### イ食に関する調査

- ・ 家庭日常の献立
- ・ 間食の種目一覧表
- ・ 本村自足の食品と栄養價
- ・ 村民食事時間の調査
- ・ 標準量に対する実量の偏差、人員及百分比
- ・ 偏差の辛年平均及全平均
- ・ 副食物食品別一覧表
- ・ 村民の出産時及病時に於ける食物

### ユの部

- やくだ (いたづら)
- やせく (夜食)
- やけ (無茶)
- やけたくれ (自暴)
- やいと (灸)
- やけんど (やけど)
- やゝこしい (まぎらはし)

### ヨの部

- ゆいたいことゆい (直言を好む人)
- やんべ (昨夜)
- よしけ (余計)
- よぐみ (蓬)
- よし (なさい)
- よじむる (一所に集む)
- よたんぼ (酔漢)
- よつひと (終夜)
- よなべ (夜業)

### ラの部

- よはれ (寝小便)
- よまい (愚痴)
- らっしもない (埒もない)

### リの部

- りこん (懶口)
- りんりき (人力車)

### ロの部

- ろーもん (老耄)

### ワの部

- わかいし (若者連中)
- わ (下男)
- わご (腋臭)
- わや (混沌紊乱の様)
- わり (わるい)

- ・村民の離乳期調査
- ・哺乳種類
- ・哺乳時間の調査

#### 口衣に関する調査

- ・家庭の衣服枚数
- ・地質別・種類別・季節別・上下別・年令別
- ・入浴回数及一回に入浴する人数の調査

#### 八住に関する調査

- ・住居の配置及方向
- ・住居、台所、便所の向
- ・井戸、台所及井戸、便所の距離
- ・井戸の種類調査

#### 二村民の睡眠時間の調査

- ・李令児童に於ける標準睡眠時間と本村李令児童睡眠時間との比較

#### ホ

- ・家庭常備薬の調査
- ・家庭療法の調査
- ・医師及助産婦
- ・出生及乳児死亡累年比較
- ・傳染病者累年比較

#### 2 各論

#### ○食に関する調査

- ・家庭日常の献立

六月二十日より二十六日迄、八月一日より六日迄、九月二十日より二十六日迄の三回に亘って、高等科女子二十七名延日数五六七日間の、献立調査の結果を見るに、大隊食品の範囲が狭く純農村なる故、殆ど自家生産物に限られて居る。當(米)養方面の考慮は少しも行われず「朝もお粥、晝もお粥・晩にもやっぱりお粥」式の同材料が縦或は横に数回連続されていることは度々見受けられる。尚料理の種類、盛付上、組合せ上についてのいかかがはしい点を多々存するのである。

次に調査票を掲ぐ

			瓜の漬物 おかゆ 4%	沢庵漬 飯 4%	麦の漬物 飯 4%	瓜の漬物 飯 4%	麦飯 いりなご 4%	ゆで菜 粥 4%	お粥 らっきょう漬 4%	お粥 らっきょう漬 4%	沢庵漬 飯 5%	麦飯 茄子の浅漬 23%	お粥 沢庵漬 54%	朝食
				ゆで菜 飯 3%	麦粥 らっきょう漬 3%	お粥 らっきょう漬 3%	麦飯 いりなご 5%	梅干 粥 5%	お粥 茄子の浅漬 6%	お粥 茄子の浅漬 6%	沢庵漬 飯 12%	麦飯 ゆで菜(したし) 13%	お粥 沢庵漬 53%	四ツ茶
麦飯 ずいきの煮付 4%	梅干飯 5%	麦魚飯 5%	麦かつお節飯 7%	おかゆ ずいきの煮付 7%	麦味噌汁飯 7%	麦里芋の煮付 7%	麦焼魚飯 7%	麦いりなご飯 9%	麦ゆで菜飯 9%	麦五目飯 9%	焼魚飯 11%	白魚飯 22%	白魚飯 22%	晝食
麦茄子の味噌和 3%	梅干飯 4%	麦味噌汁飯 4%	麦沢庵漬飯 4%	梅おかゆ 干 4%	麦茄子の浅漬 4%	麦らっきょう漬 4%	麦ゆで菜 おかゆ 6%	麦茄子の浅漬 6%	麦金山寺味噌 7%	麦おかゆ 魚 7%	焼お粥・白飯 7%	沢庵漬 おかゆ 47%	おかゆ 47%	八ツ茶
味噌汁 おかゆ 2%	ひじきの煮付 3%	麦茄子の煮付 3%	麦野菜の煮付 3%	かしわ 飯 3%	麦里芋の煮付 3%	麦おかゆ 3%	麦五目飯 3%	麦茄子の煮付 5%	麦瓜の漬物 5%	麦茄子の味噌和 5%	麦ゆで菜(したし) 8%	麦沢庵漬 55%	麦おかゆ 55%	晩食

之に依って本校家事科は献立作成上の指導を、理論的と実習の両者より充分になし、自家産物なるが故の大食主義、浪費主義、一度一度が簡単な申し分的な、食事である所から来る回数多し事を避けて、営(栄)養と、経済(時間・労働・金銭)に立脚した経済的營養法の指導を進めて行くべきである。

○間食の種目一覧表

	自	家	用	賜	用
春 期	あられ 大豆の いった	物	もち かき いりごめ	ゆすらも 夏蜜柑	せんべい 饅頭類
夏 期	莓 西瓜 蚕豆 びわ	葡萄 なし	夏蜜柑 水蜜桃 トマト 山桃	すもも とうがらし	キャラメル あめだま類
秋 期	柿 栗 梨 無花果	ゆで豆 れいしゅ	甘蔗 甘藷	砂糖	
冬 期	椎 かんしょ				

○児童の辨当調査・主食の温量に関する調査

我が国民の体格が、西洋諸国の其れに比して遜色ある理由は、一に家庭婦人の食物に対する營養觀念の不足より来るものであらうと思ふ。さて幸校が児童を通して、家庭の人々に營養問題に對する正しい知識と理解とを附與することは、食糧問題解決の有力なる一手段である。この立場に立って、我校に於いて九月十日、九月二十日、十月一日の三回に亘つて尋常科全部に對する児童の辨当調査を行ひ栄養改善の一策としたのである。次にその一部をあげる。

○本村自足の食品と栄養価

食 品 名	蛋白質	脂 肪	含水炭素	カ ロ リ ー ／ 1 0 0 g	1 0 0 cal ヲ 得ル数量		食 品 名	蛋白質	脂 肪	含水炭素	カ ロ リ ー ／ 1 0 0 g	1 0 0 cal ヲ 得ル数量	
米 飯	3.2%	0.05%	32.3%	146cal	68g	18 匁	せ り	2.0%	0.1%	3.2%	22cal	465g	121 匁
米麦飯 7:3	3.3	0.1	29.2	134	75	20	ぜんまい	20.3	0.5	42.0	260	39	10
麦 飯	3.8	0.2	18.7	94	106	28	蚕豆(乾)	25.7	1.7	47.3	315	32	8
き び	10.4	3.6	69.7	362	28	7	大 根	0.7	-	3.7	18	555	148
粥	1.2	0.3	13.3	62	161	43	筍	2.6	0.1	4.5	30	333	89
沢 庵	1.4	0.1	6.0	31	322	86	大 豆	34.7	18.0	27.7	423	24	7
茄 子	1.0	0.1	3.1	18	556	148	玉 葱	1.6	0.1	8.0	40	250	67
らっきょう	0.9	0.1	7.9	37	270	72	なたまめ	20.1	1.6	43.0	274	37	10
小松菜	2.5	0.5	1.2	20	500	139	人 参	1.3	0.4	7.4	39	256	63
きうり	0.9	0.1	2.0	13	769	205	ね ぎ	12.2	13.8	14.7	239	42	11
里 芋	1.4	0.1	11.7	55	182	49	菠 薐 草	2.3	0.3	1.7	19	526	140
づ い き	4.1	2.1	41.0	20.4	49	13	馬 鈴 薯	1.5	0.1	19.2	86	116	31
青 豌豆	5.4	0.5	10.0	68	119	32	松 茸	2.9	0.6	10.9	62	161	43
いんげん豆	20.4	1.1	53.2	312	32	9	三河島菜	2.4	0.6	0.8	19	526	140
う づ ら 豆	18.9	1.2	57.8	326	31	8	み つ ば	0.9	0.1	2.5	15	667	178
白 瓜	1.2	0.5	4.1	26	385	103	ゆ り	3.3	0.1	24.2	114	88	23
糸んどう未熟	6.6	0.5	12.4	83	120	32	れんこん	1.7	0.1	10.9	53	189	60
か ぶ ら	1.6	0.1	2.8	1.9	13.2	25	わ ら び	2.8	0.1	1.4	18	551	148
南 瓜	0.7	0.1	6.1	2.9	31.5	9.3	千切大根	0.9	2.9	39.6	20.4	4.3	1.2
さ つ ま 芋	1.7	0.2	28.8	12.6	7.9	0.1	牛 蒡	11.4	0.1	25.2	119	91	24
京 菜	2.1	0.2	0.2	11	90.9	24.0	ごま(黒)	19.7	44.2	19.4	57.1	18	5
こんにやく			3.1	13	769	205	梅 干	0.9	1.2	7.5	96	217	58
じねんじょ	2.8	0.1	18.0	86	116	31							
しやうが	0.8	0.3	13.6	62	161	43							

○個人別標準量並に実量比較表（尋 三）

学 年	姓 名	身 長	体 重	体表/面積	辨当定量	主食実温量	基礎営容量	総營養量	主食一回標準	偏 差
尋 三	津 村	120	22.1	0.89	535	659	1047	1876	449	1.47
	夏 目	119	26.1	1.05	330	404	1235	2195	527	0.77
	山 添	118	21.3	0.85	340	414	1000	1777	426	0.95
	黒 租	121	24.1	0.98	340	414	1153	2051	492	0.84
	山添ス	119	22.6	0.91	430	530	1071	1905	458	1.15
男	東	122	23.0	0.94	460	567	1106	1966	472	1.20
	大 林	110	19.3	0.70	385	474	824	1465	352	1.35
	中 原	123	22.5	0.90	450	554	1059	1882	452	1.23
	若 狭	117	19.9	0.78	275	337	918	1632	392	0.86
	南 方	118	21.1	0.84	304	375	988	1757	422	0.89
尋 三 女	前 田	117	21.6	0.85	320	395	1000	1777	426	0.92
	平 野	113	18.3	0.69	356	439	812	1444	347	1.27
	古 谷	113	19.5	0.74	350	438	871	1549	372	1.18
	中 村	111	18.8	0.70	470	579	824	1465	352	1.64
	辻 浦	109	16.8	0.61	220	271	718	1221	293	0.93
	夏 目	112	19.0	0.71	355	413	835	1481	357	1.16
	西 山	118	20.7	0.82	220	271	976	1735	417	0.99

○標準量に対する定量の偏差人員及百分比

		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	計	百分比
(+) 1 人員	男	8	6	5	0	0	2	21	55.3%
	女	4	2	4	0	0	0	10	33.3
	計	12	8	9	0	0	2	31	88.6
(-) 1 人員	男	0	1	6	4	4	2	17	44.7
	女	0	1	2	5	6	6	20	66.6
	計	0	2	8	9	10	8	37	101.3
備考 人員	調 査 男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	
		8 4	7 3	11 6	4 5	4 6	4 6	38 30	

○村民の食事時間調査

年 齢	調査人員	朝 食		四 ツ 茶		晝 食		八 ツ 茶		晩 食	
		時 刻	時 間	時 刻	時 間	時 刻	時 間	時 刻	時 間	時 刻	時 間
60	25	6:20:00	6:00	9:19:00	5:00	11:15:20	11:20	3:05:00	5:00	6:27:00	6:00
50	35	6:04:00	6:26	9:12:00	6:30	11:23:34	7:51	3:06:00	6:00	6:46:34	10:20
40	25	6:15:00	15:00	9:15:00	5:00	11:50:30	7:15	3:02:00	6:20	6:30:54	12:05
30	30	6:22:30	5:45			11:51:52	9:42	3:00:00	6:00	6:56:00	11:48
20	75	6:05:20	7:09			11:21:36	8:30	3:06:00	4:30	6:37:43	8:39
10	50	6:14:30	9:15	9:20:00	8:15	10:53:30	8:25	3:05:00	10:15	8:44:30	18:00

上は九月一日より六日迄、児童の各家庭に於ける、食事時刻及時間を調査し、その平均をとったものであるが、之によって一度一度の食事は簡単で、申し分的分子が多量に含まれてゐる事、食事回数の多くなって来る理由も、自ら明らかとなつて

○偏差の享年平均及全平均

要項\享年		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合 計	平 均
男 子	人 員	8	7	11	4	4	4	38	
	標準対実	1.398	1.226	1.057	0.757	0.637	0.930		1.001
女 子	人 員	4	3	6	5	6	6	30	
	標準対実	1.548	0.977	1.196	0.812	0.592	0.822		0.991
計	人 員							68	
	全 平 均								0.996

・計算の方法 (白石氏の調査方法を参考とす)

○体表面積 = 体重<sup>4.7</sup> × 身長<sup>7.28</sup> × 74.49

0.85 m<sup>2</sup> = 20.6kg 122.5cm

朝晝晩の比率は温量に於ては3 : 3 : 4で昼食は30%にあたる

○晝食(辨当全量)の中副食物として20%を除き標準量を決定す

○米飯100gの中温量を154 Calとして計算する

○米食実温量 = 154 Cal × 辨当実量 × (1 - 0.2)

○基礎營養量 = 單位体表面積 × 体表面積 × 24 (時間)

○單位体面積要求量

5才~7才 = 36 Cal (約) 1日

8才~10 = 49 Cal (尋1 ~ 尋3)

11才～14 = 58 Cal (尋4～尋6)

○総栄養量 = ( 基礎栄養量 + 基礎栄養量 / 2 + 基礎栄養量 / 10 ) ÷ 9 / 10

○主食一回標準量 = 総栄養量 × 30 / 100 × ( 1 - 0.2 )

○村民睡眠時間調査

年 令	調査人員	平均就寝時刻	平均起床時刻	平均睡眠時間
70	10	8時 30分	5時 30分	9時 00分
65	8	8 20	5 00	8 40
60	5	9 57	5 00	7 03
55	9	9 20	5 00	7 43
50	15	10 00	4 48	6 48
45	6	11 00	4 00	5 52
40	15	10 25	4 17	7 50
35	7	9 15	5 05	8 17
30	9	9 30	5 47	7 53
25	15	9 13	5 06	8 17
18	10	9 50	6 07	7 48
16	8	9 18	5 06	8 50
14	20	8 37	5 27	9 05
12	16	8 25	5 30	10 43
10	13	8 12	6 55	9 43
8	20	7 51	5 34	10 53
6	20	7 30	6 23	11 30
5	12	7 28	6 58	

○哺乳時間調査

	午 前	午 後
時 刻	7:08:00 ; 11:03:30	2:31 ; 6:15 ; 9:30
時 間	10分03秒 ; 15分30秒	8分20秒 ; 10分30秒 ; 19分

○哺乳種類

種 類	母 乳	牛 乳	ラクトーゲン	ミ ル ク	母乳・オモユ	オ モ ユ
該当数	63	15	—	—	9	—

○孝令児童に於ける標準睡眠時間と

本村孝令児童睡眠時間との比較

年 令	標 準 時 間	実 際 時 間
18	9時 30分	8時 17分
16	10 00	7 48
14	10 30	8 50
12	11 00	9 05
10	11 30	10 43
8	12 00	9 43
5～6	12 30	10 53

\* 左掲睡眠時間表ト実際時間ト異ナル  
写シアヤマリナルベシ

○村民の離乳期調査

哺乳期間	二年二ヶ月	一年三ヶ月	二 年	ハ ヶ 月
該 当 数	13	5	12	10
哺乳期間	二年六ヶ月	三年二ヶ月	五年三ヶ月	
該 当 数	11	6	2	
平 均	1年9ヶ月			
調査人員	60名			

\* 左は60名の乳児について3日間の平均をとったものである。大体大人の食事前にのませるらしい。

調査の結果本校に於ては、正食者の数よりも偏食者の数の方が多い位で、全く家庭營養觀念の輕薄な事は之でも知れるのである。次に辨當の副食の調査をして見たのであるが、調査人員六十八名中副食らしいものがなく、只醬油をかけて食してゐるものが三名もあつた。大体に於て一年生は辨當の持殆免であるから、副食等も概してよく食事時間もよいが、上級の者は一般に早く終らうとする傾向がある。女子等は殊に小さい辨當を重宝がつてゐるらしい。この風は一時も早くなほさねばならぬ。

○副食物食品別一覽表

動物性		植物性	
調査人員	食品名	調査人員	食品名
三	焼魚	四	梅干
三	さば	二	沢庵
	太刀魚		松茸
	鶏		煮豆
	鮭		海苔
	煮魚		昆布の煮付
	たちを		高野豆腐
	さば		べにしようが
	鯉		菜の煮付
	いりなご		醬油
	かつをぶし		

○村民の出産及病時に於ける食物

調査人員		主食		副食	
七	五	食品名	食品名	食品名	食品名
		粥	梅干	15	魚
		やわらか米飯	10	75	ずいき
				60	ふ
				75	高野豆腐
				50	かんびよう
				15	昆布
				10	

○出産時に於ける迷信及信仰

- ・ほうきをかついだら、ほうきの子供が出来る。
- ・つるものを食べたら悪い。
- ・蜜柑の二袋一緒になつたものを食べたら二子を産む。
- ・火事に驚いたら、赤いあざのある子供が出来る。
- ・子供の生まれる時鍋の耳をかいたら、耳のない子供が出来る。
- ・ほうきをまたごえたら悪い。

○食事の保存状態

- ・御飯 蓋をせず金網でふせてをく風通しのよい所へつるす
- 井戸へつるす

・副食

涼しい所へおく  
よく煮つめて箸をささない

たきかへす

井戸へつるす

金網でふせておく

・農産物

葱類

土の中へ埋める

暗い所におく

水中につけておく

芋類

すりぬかの中へ埋めておく

土の中へ埋めておく

芋穴へ入れる

ねづみ入らずへ入れる

菜類

塩押しをする

水へつけてをく

暗い所へおく

牛蒡

土中へ埋め藁をのせてをく

大根

沢庵漬にする

干大根（丸なり）

きざんでほす

茄子

浅漬けにす

すりぬかへ埋める

湿った布をきせる

果物

金山寺味噌の中へ入れる

酒の中へつける

すりぬかへ埋める

す桶へ入れる

〇〇五 四 三 〇 五 一 一 二 二 〇 五 九 〇 一 五 五 〇 〇 一 一 五 〇 〇 二 八 七 三 四

○衣に関する調査

五年、六年高等の女子を通じて、各自家庭の全員の衣服枚数、地質別、種類別、季節別、上下別、年令別を調査した結果、枚数は総体に不足なきようであるが、上着の枚数と下着のそれをよく比較して見ると、概して下着の方が少ないのである。下着は洗濯が容易であるからで、あると思ふかも知れないが、先づ下着は上着よりも多くなければならぬと思ふ。

・女子の部

10	20	30	40	50	60	令年		項要	
						木綿	毛	上	夏
7.5	6	4.5	10	9	9	木綿	毛	上	夏
2.3	2	5	1	3	1	毛	絹	着	
0.4	1.45	5.5	5	6	4	絹		上	下
3.5	3	6.5	3	4	4			下	着
3	3	6	3	3	3			下	着
2.3	3.7	5.5	5	4	6	木綿	毛	羽	冬
0.8	1.6	4.5	0.7	0.5	0	毛	絹	織	上
1	2	3	0.7	2.6	3	絹			
3	2.5	8	7	8	7	木綿	毛	裕	
1	3	7	2	2	0	毛	絹		
2	3	10	4.5	6	3	絹			
1.5	2.4	2	2	3	3	木綿	毛	綿	着
1	1.6	0.5	0	0	0	毛			
1	0.9	0	2	1	2	絹		入	物
2	2	4	2	4	5				下
3	4	5	3	3	4				着

・男子の部

10	20	30	40	50	60	令年		項要	
						木綿	毛	上	夏
6	4.3	4	4	4.5	7.7	木綿	毛	上 <td>夏</td>	夏
3.3	1.3	0.8	2.1	0.5	1	毛	絹	着	
2	2.4	1	1.6	0.5	3.7	絹		上	下
2	3.4	5	4	4	4.5			下	着
2.0	3.3	6	4	2	3			下	着
2.5	1.4	2.5	2	2.5	4.3	木綿	毛	羽	冬
1.5	1.7	1	1.2	0	1	毛	絹	織	上
2.3	1	2.5	3.3	3	2.5	絹			
3.7	3.6	3	4	4	5.5	木綿	毛	裕	
1.7	1.7	0	0.6	0	0	毛	絹		
1.7	3.3	2.7	2.6	2	3.3	絹			
3.3	2.3	0.5	3.6	2	2	木綿	毛	綿	着
0.7	0.5	0	2	0	0	毛			
0.3	1.5	0.3	0.4	1	1	絹		入	物
4	5	4	3	3	5				下
4	3	3	3	3	3.2				着

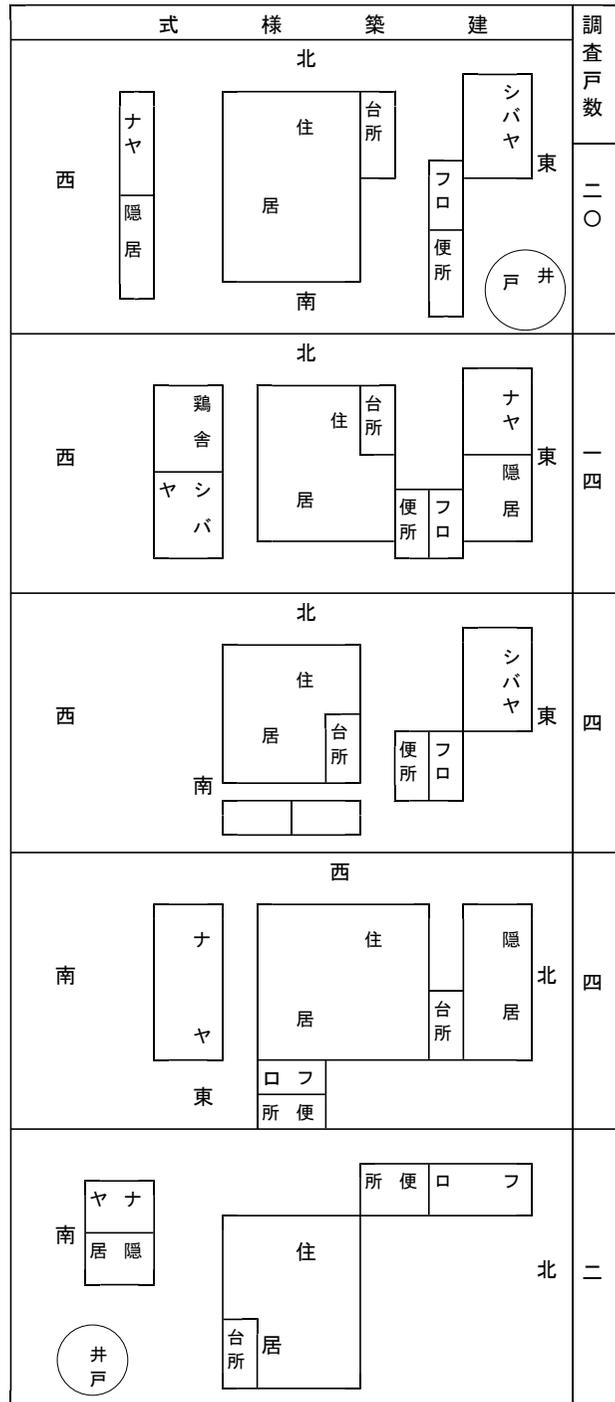
○住に関する調査

・住居の配置及び方向

農村の住居は家族安息の場所、事業筑源の場所であると同時に、農を行ふ作業場でもある。その作業をなす方面から考へて見るに、割合都合よく出来てゐる様に思ふが、

・住居の数量及び方向

衛生方面及台所改善の立場より考察すればまだまだ改善点はある。



・住居・台所・便所の向き

調査戸数	筒所	向	全体との割合(%)
四	*1住居	東	8.3
		西	8.6
		南	8.3
		北	0.1
四	台所	東	20
		西	0
		南	4
		北	76
四	便所	東	25
		西	4
		南	67
		北	4

\*1 データの写し間違い？

該当戸	距離	筒所
5	0	*2
3	1	
3	2	
5	5	
1	7	
1	8	
1	9	
計19	3	平均
1	1	*3
6	2	
2	3	
3	4	
2	5	
3	6	
2	9	
計19	4	平均

\*2 5 3 記入漏れ

\* 4 (井戸の種類) の調査

種類	ぼんぶ	はねつるべ	くるま	振りつるべ	河水	泉
該当戸	14	6	1	21	1	2

\* 4 表題なし( )内は  
章博銘々

○ 家庭常備薬

風邪薬		調査		調査		調査		調査		調査		調査		調査	
品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量
六神丸	八	まくり	八	あんまこうやく	一八	氣づけ薬	三	小児・婦人薬							
せきとめ	九	せめん	一六	水銀軟膏	五	虫下し	一								
トンブク	一八	寄応丸	一〇	石炭酸軟膏	六	かつしよべい	二								
アンチピリン	三	きな円	三	ヨードチンキ	一	産婦湯	一								
風邪熱さまし	一七	うにこうろう	八	オゾ	四	女神丸	二								
急活丸	四	てきめん散	一	メンソレータム	三	実母散	七								
万能丸	一	腹痛妙薬	一〇	あかぎれこ	四	中将蕩	五								
風邪薬	四	とらや	六	リスリン	三										
ねっぴりん	一	下り止め	三	ワセリン	一										
頭痛散	二	和歌の浦	五	ピック	二										
天一丸	二	そうめい散	四	歯痛薬	二										
流感散	一	じゃこう散	二	きづくすり	一										
当世丸	一	きたん丸	一	のうじょう	一										
たんせき	二	まんきんそう	三												
ピリン丸	二	仁丹	一												
沈熱	二	せんき薬	六												

○ 家庭療法の調査

病名		調査		調査		調査		調査		調査		調査		調査	
品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量
びわの葉	二	みご		どぜう	三										
すも	一			ごま油	一										
おぼこ	一五			味噌漬の茄子の汁	一										
はこべ	三			おもとの根	三										
たまねぎ	三			雪の下	一										



○医師及助産婦

- ・医師は村に一人もなく、校医は隣村にあり。
- ・助産婦は村に一人あれども御坊より迎へること多し。上の如き状態なれども、御坊に接近せるを以て不便を感じず。

○傳染病者累年比較

要項 \ 年度	2	3	4	5	6	計	平均	備考
肺 結 核	0	1	4	0	3	8	1.7	
レ プ ラ	0	0	1	0	0	1	0.35	

○出生及乳児死亡

年度 \ 要項	男			女			差引男女計
	出 生	死 亡	差 引	出 生	死 亡	差 引	
2	28	3	25	43	7	36	61
3	24	3	21	28	3	25	46
4	23	2	21	19	4	15	36
5	35	6	29	23	1	22	51
6	30	4	26	27	5	22	48
計	140	18	132	140	20	120	242
年 平 均	28	3.2	26.4	28	4	24	48.4

一、『野口村村誌』あるを『日高郡誌』にて知り、是を借覽せんとして、その後更に『野口郷土調査』一巻行はれたる事判り、先づ本書の筆寫に取掛りたり。

一、原本は謄寫版刷、美濃半紙にて、発行當時郡内官公署、孝校等に配付せられたるものゝ如く。寫本の原本は矢田村役場にありたるものなり。

一、本書編纂の趣旨、方針は序文に明らかなる如く、従来各地に行はれたる所謂村誌とやゝ趣を異にし、村の生活実態の把握に重きを置き、以て教育方針の参考に資せんとせるものゝ如し。

一、就中興味深きは、村の經濟方面に或は衛生方面にして、今後の村誌編纂方針は唯に神社佛閣の考證方面に止まることなく、或時代の或村の食生活、或は衣・住の点に重点をおく等幾多参考とすべき点多し。

一、もしそれ經濟、衛生、植物、生物面に注ぎたる努力を、神社佛閣の考證に、更に神社佛閣を通じての吾等の祖先の生活面にふれんか、更に一層の興ありしものと思はれる。

一九四九、一一、二七夜

晴雨の音を聴きつゝ筆寫のペンを擱きて

清水 長一郎

○使用済み書類の裏にペンにて、親爺が寫筆ものを『一太郎 ver.12』で活字化する。

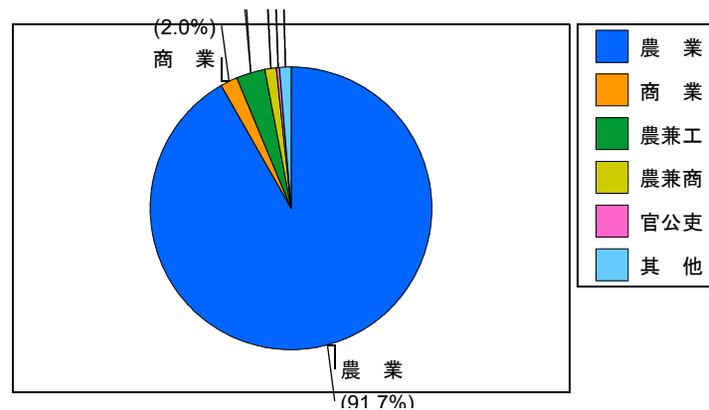
○親爺の寫本時に生じたのか最初からか不明だが、第二篇以降目次と本文の関連性がなく、苦労した。また原本の通り筆寫した結果か、筆写時のミスか、誤りではないかとハッキリ判る記述や文字も、出来るだけそのまま活字化した。

平成一五（二〇〇三）年七月二五日

清水 章博

○野口村の職業別戸数

	農 業	商 業	農兼工	農兼商	官公吏	其 他	計
	278	6	10	4	1	4	273



○土地・面積

種 目	田	畑	宅地	山林	?	計
面 積	174.3	59.7	4.57	173.7		412.6

